

大正二年五月十日發行

# 婦人と子ども

第十三卷  
第五號

フレールベル會

第十三卷第五號目次

保姆論

英文學にあらはれたる子供(五)

『トム』と『マギー』

小兒の傳染病(四)

手工應用玩具の造り方

保育の此頃

元良先生と坊や

雜錄

附錄

美學講話(第五回)

岡田みづ

石塚保吉

藤五代策

佐藤滿壽

若き父

菅原教造

本誌定價

一冊郵稅共金拾壹錢 六冊前金郵稅共六拾錢  
拾二冊同金壹圓貳拾錢 郵券代用一割増

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ  
込み下さい。直に御送本致します。(振替口座東京一七二六  
六番)

本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます

(庶務上保姆紹介に關する件をも含む)の御手紙は  
東京市小石川區久堅町七十四番地フレイベル會事  
務所宛

會計事務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内、  
雨森劍宛

本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下千駄  
谷八七八倉橋惣三宛

大正二年五月七日印刷  
大正二年五月十日發行

編輯兼發行者 倉橋惣三  
東京府豊多摩郡千駄谷町大字千駄谷八七八

印刷者 平井登  
東京市本所區番場町四番地

印刷所 東京市本所區番場町四番地  
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 東京市小石川區久堅町七十四番地  
フレイベル會

# 婦人と子ども

第十三卷第五號

## 保 姆 論

### △保姆に關する二様の見解

まるくと肥えて、林檎の様につややかな頬。深紅のリボンを蝶々に結んだ、ふさくとした垂髪。鈴の様につぶらに、睫の長い黒目勝もの、朝の露にも似た清い眼。もの言へば指でついた様な深唇が出来て、眞珠を植えた可愛らしい齒並のこぼれ出る、乙女椿の蕾にも似た口もと。英吉利風に幅廣の雪白なカラーに、きちんとした蝶結びのネクタイに、瀟洒に取りすました小公子。ゆつたりとした白エプロンの下は、目のさめる様なメリンス友染の元祿袖に、とき色のへこ帯がよく似合

ふ快活な小公女。……斯ういふ可愛らしい幼児達を相手にして、別に定まつた課業があるではないし、浮き立つようなマーチの曲に、可愛らしいクラッピングの調子をあはせて、蝶々の眞似をして見たり、鳩に豆をやる眞似をして見たり。遊園のお山登り、池めぐりがあきて來れば、昔々のお伽噺。一番むづかしい事といふのが折紙粘土細工位のもの。要するに玩具と歌と遊びとで子供と一しよに笑つてさへ居ればよいのである。世の中に保姆ほど氣樂な、面白い一方の仕事はないと言ふ人があ

る。  
そうかと思ふとまた一方には之れと正反對に、

いやだ、年が年中子供のお守りばかりして、あんな世話のやける、小面倒な、うるさい仕事は、死んでもいやだといふ人がある。そういう人から見た保母の仕事は、世にも一番骨の折れて、気が疲れて、而して要するにくだらない苦勞一方の仕事なのである。

どちらにしても、實際に就てよく考へて見なければ分らない。

### △保母の苦勞

保母その人に訊ねて見たらば、其の仕事をつらいもの、いやなものだと言ふ人は一人も無い。そんな人のある筈は無いのである。しかし、保母の仕事は局外の人が表面から見ると、氣樂一方、面白一方のものでは決してない。

ほんとうの理屈からいへば、子供と遊ぶといふことが、實は非常に六かしい、深い心づくしを要することなのであるが、それは先づ暫く別問題とし

て置いて、ただあゝやつて毎日々々子供と楽しく遊んで居るといふこと丈けで、それ自身容易のことでないのである。一日半日ならば一生懸命子供の相手は誰れにも面白いものである。しかしそれが毎日である。永く、繰り返かへされて居るのである。退屈まぎれにたい一寸子供と遊ぶ時の面白さを以て、保母の仕事としての遊びを律し得る譯のものではない。永い間には、氣分の悪い日もあらう。胸に一身上の心配のあることもあらう。出来ることならば一日何もしないで考へて居たいようなこともあらう。殊に保母には物思ひ易い若い年頃の人が多い。何彼につけて心に動搖の起り勝ちなものである。しかも毎日同じ様に機嫌よく子供と遊んで居なければならぬのである。——そんなことは保母の仕事に限つたことではない。總ての勤務に伴ふものだといふ人もあるかも知れない。誠にそうに相違ない。併し保母の仕事が外面如何にも氣樂千萬に見える爲か、保母の苦勞を之れだ

けにも察して居て呉れない人がある。實際毎日あ  
あやつて子供と楽しく遊んで居るといふことは、  
誰れにでも出来る容易なことではないのである。

尤も人は結果さへ得られるならば、途中は容易  
く忍び得るものである。尙ほ又結果があるといふ  
手答へさへあるものなら、それだけでも途中の苦  
勞が慰めもされ、忘れられもするものである。然る  
に保母の仕事は此の「手答へ」なるものに於て最  
も弱い性質のものである。理論上の結論や、經驗  
上の自信は兎に角くも、日々その時々、之れだ  
け遊んだから、子供に之れだけ利益があつたとい  
ふ風の手答へは全くないのである。之れが學校の  
教育となれば、如何に下級であるとしても、讀本  
を一枚教へた、九九を一つ覚えさせたといふ處に、  
目に見えた結果がそこに現はれて居る。保育の仕  
事では、それさへ少しも得られないのである。極  
端にいへば、こうやつて毎日々々して居ることが、  
果して如何に効驗のあることが、疑ひ出したら分

らなくなるものである。自分の仕事に手答へのほ  
しいのは誰れでも同じであるが、若い者には殊に  
それが強い。それも仕事に無責任な呑氣家ならば  
兎に角く、熱心家誠實家になればなるだけ、仕事  
に手答がほしいものである。身を碎いても手答の  
あることがし度いといふが熱心家の心理である。  
それが毎日同じように、積木を積んでは崩し、崩  
しては積んで居るのでは、結果を急ぐ血氣の若い  
者には、如何にもまだるこいことである。しかも  
保育といふことが本來斯ういふ性質のものである  
とすれば、疑はず惑はず、急かす焦らず、一貫し  
た努力を以て、毎日の「遊び」をつづけて居なけ  
ればならない。これがながく、以て容易のことと  
ないのである。

立つて居る時間の多い爲に、身體の疲勞の大き  
なることや、その爲に被むる生理上の諸害や、幼  
兒の世話のこまかくと手のかゝることや、一刻も  
頭の安まらぬ氣苦勞や、之れ等のことは敢て言は

ない。それは外からも分ることである。たゞ局外から見ただけでは分らない保母の苦勞の中には右に述べたやうな、人の知らない大苦勞があるのである。心に悲しいこと、つらいことがあつても、三百六十五日機嫌よく子供と一しよに笑つて居なければならぬ。教育と言つても其日々には殆んど何の手答へもない様のこと、しかも熱心に一生懸命で子供と遊んで居なければならぬ。此の孰れかで、保母の心は人知れぬ苦惱になやむことが時々ある。

### △保母の慰勞

何事も眞の苦勞は局外からは分らないが、眞の慰勞も局外からは測られぬものである。局外から分る様な苦勞は、らくな方の苦勞である。局外から測り得られる様な慰勞は、浅い慰勞に過ぎぬことが多い。眞の慰勞は常に我が個中のものでなければならぬ。

又、世にいふ大抵の慰勞なるものは、其の仕事から見て間接のものであることが多い。御苦勞でした、先づお茶を一つといふ類のことを、慰勞々々といはれて居る。勿論それも確に一つの大きな慰勞である。慰勞する方の眞心から云つても、慰勞さるゝ方の感じから云つても、確に一つの慰勞である。併し、すべての眞剣な仕事は、そんな間接のことのみで慰勞せらるゝものではない。寧ろさういふ間接のことゝは全く無關係に、仕事そのものから直接的の慰勞を與へらるゝものである。而して教育者の慰勞は皆此の種のものである。その勞力、苦勞に對して、如何なる多大の間接的慰勞と雖も、到底之れを充分に報ふるに足るものではないのである。教育そのことから生ずる直接的慰勞ほど、眞に教育者を慰勞し得るものは無いのである。

人知れぬ大苦勞のある保母の仕事も、此の直接的な人知れぬ大慰勞を有して居る。それは他でも

ない、人間の中恐らく一番清淨無垢な幼児の心から、清淨無垢の愛を受取り得ることである。そういふ幼児達から信用と尊敬とを以て深く親しみ慕はるゝことである。實に此の人知れぬ慰勞一つに保母は其の總ての苦勞を忘れ得るのである。

其の勞力の大きいことに於て、その間接的慰勞の途の甚だ薄きことに於て、保母は決して割のよい仕事でもなく、羨むべき位置でもない。少くも現在に於ては、世に最も慰勞少なき仕事の一つである。しかし、一度よく、自ら個中の眞味を味ふことの出來た人に於ては、之れ程楽しい、之れ程幸福な、之れ程慰勞多き仕事は無いと謂はれて居る。あゝ／＼實に愉快です幸ですとは、尊敬すべき熱心なる保母諸君の口から、屢々漏るゝ、自白である。而して此の慰勞を得ることなくして保母の業に従ふて居る人があつたら、恐らく其の勞に堪えぬことであると思ふ。

### △保母の歡喜

毎日々々の保母の慰勞は、即ち幼児に直接し、幼児と相親しむことから自然に得られて居るのである。しかも保母の仕事は、此の日常の慰勞の外に、時あつて大いなる特別の歡喜に遇ひ得るものである。即ち保育上何か特別に困難なる幼児があつて、特別の苦心、特別の勞力を盡した末、多少なりとも其の結果の得られた時、初め其の幼児の爲に注いだ悲みの涙は、茲に非常の大歡喜と變じて、保母の胸は喜悅の大濤に濤立ち轟く思ひがするるのである。素より困難の程度に従つて、歡喜の程度もいろ／＼に違ふものであるけれども、此の純粹なる保育上の喜びによつて、保母は其の仕事<sup>を</sup>天下何ものにも替へ難きものに思ふ様になるのである。

但し、その「結果」なるものは、外から見て決して大いなる結果、美事なる成功に限つたことでは

ない。前にも一寸述べた通り、他の多くの仕事に比べて、一つ／＼手答へもなく、著しい目の前の結果もないのが幼児教育の一つの持前である。もし手答へと常に目ざましい成功とをのみ期待する人は、失望するか無理な結果を作るかの二つに終らざるを得ないのである。そういふ期待の強い人は、神童だけを集めて教育するか、乃至猿が山雀にでも藝を仕込んで、見物人を驚かすがよい。普通の幼児教育は元來がそういふ譯のものでないのである。そこで保母が非常の歡喜として居ることも、局外者から見たら何でもないことであることもある。時には幼兒の心に一分の進歩、一厘の發達がほの見えたとして、保母は嬉し涙に泣くことがある。戦勝の純忠將軍が凱旋門をくゞる時と同じような眞摯の感激に胸ふたがる思ひをすることがある。蓋し結果の大小が此の歡喜を生むのではなくて、保母の熱誠努力そのものが、之れを生むのであるからである。

大きい努力から些少の結果を得て、そこに大歡喜を感じることに於て最も強甚なるものは彼の白痴教育家であらう。教育の効果に於て其の期待最も僅少なからざるを得ざる此の教育は、局外者の目よりすれば殆んど常に無効なる努力を爲して居るもの、如く見ゆるものである。若し結果の著大を以て人若しくは自己に誇らんとする心から此の教育をするものがあつたら其の人は失望とならざるを得ないのが常である。其の大努力小結果の點に於て、保母の仕事よりも實に一層なるものといふべきである。即ち此の白痴教育家が其の仕事から其の慰勞と歡喜とを得るの狀は、保母の眞の歡喜が如何なる性質のものなるべきかを語るに最も適當なるものである。即ち吾人の常に敬嘆尊崇せる彼の白痴教育の大家リチャード氏が、シルヴェーナスを教育することによつて得たる歡喜の狀を、我國人中同種の經驗を最よく理解し、最強く感興を得る人の筆によつて茲に學び度いと思ふ。



「該兒は八歳半にして自己の母と他人とを區別すること能はず試みに光輝ある物體を其目に近づくるも聊羞明を感ずることなかりし。其の下肢は麻痺して歩行すること能はず。痛覺觸覺さへも異常ありし。リチャード氏は一度彼を見るや同情の念禁じ難く、如何にもしてこれを教育せんものと、先づ兩手に彼を抱き、これを撫で、これに飲食せしめ殆ど一ヶ月の日子を該兒の研究觀察に費せり。既にして以爲らく先彼を教育せんと欲せば自ら彼の位地彼の程度に下らざるべからずと。之れ實に氏が成功の秘訣なりし。氏は先三ヶ月間殆んど毎日毎時間倦まず屈せずして彼の爲に或書を朗讀せり。而して其これを讀むや對手の無知無勞なる白痴なることを念頭に浮ぶることなく、眞實知識ある教育ある人の爲に朗讀するの心となり、其の態度を以てこれを續けたり。氏が赤誠の無感無覺なりし彼の心に響きやしけん。遂に稍心を氏の音聲に傾くるに至れり。一日氏は該兒の傍に坐し默讀して少しも聲を發せず、以て私に其の舉動如何と注意せしに、彼は頗る物足らぬ心地して不安の状態にありしかば、氏は例の如く溫顔を以て彼に近づきシルヴェーナスよ、汝は余を要するや。よし余はこゝにありと云ひしに、こはそも如何に、彼はアーと一聲發しぬ。こゝに於てか氏は確に彼に第一の欲望を植へつけたり。彼は實に氏を要せしなり。依りて氏は更に二三ヶ月間同じ朗讀をつづけし後一日再び默讀を試みしに、此度は彼何事かなさんとするものゝ如くなりしかば、其の爲すがままいに任せて少しも妨げざりしに、彼は徐々に手を擧げ指頭をリチャード氏の唇に觸れたり。依りて氏は再び讀まんことを余に求むるやと言ひつゝ再び朗讀を始めたなり。かくて第二の欲望

植へつけられぬ。それより氏はいつも先該兒に氏が唇を開かして後讀むことせり。遂に彼は微笑せり。これ彼が生來始めての笑なりしとぞ。リチャード氏の喜が何ものかこれに如かん實に積日の勞に報い得て餘ありと云へり。該兒はその後も益々發達し且常に氏を慕ひ氏と共にあるを以て無上の快樂と存せりかかりし程に彼は一日其四肢を動搖し始めしかば、彼の手を伸べ膝を屈めて葡萄を教へぬ。これ實に彼が學校に入りしより一ヶ半年の後なりし。此時氏は熟々考へぬ。彼に言語を教へ得べきかと。彼は其時まで未だ一語も發せざりしなり。氏は彼に向て『此手を動かせ』甚可なり』次に他の手を『そはよき兒なり』『此度は此足を』甚可なり』次に他の足を『そはよき兒なり』と毎日同一の言語を反覆し同一の所作をなさしめつゝ數日を過せしに、遂には單獨にてこれを試みんとし、且其唇頭の稍動きつゝあるを認めしかば、氏は試に耳を彼が口に近づけしに、不思議なるかな、彼はリチャード氏がさきに反覆せし『此手を動かせ』甚可なり』云々の言語を獨語しつゝありし。即ち氏の言語を耳にして、自らこれを語らんとする迄に至りしなり。

彼が發達はこれに止らざりき。リチャード氏は實物教授を始める。氏は彼が爲に一足の靴をあつらへ、其の製造の様を見るべく毎日彼を革屋に伴ひ、店頭靴を指しつゝ、こは何ぞシリヴェーナスと、氏問へば、彼は靴なりと答ふ。それを製造せしものは誰ぞと、氏問へば靴屋なりと答ふ。又パンを指しこれは何ぞと問へばパンと答ふ。それを製せしものは誰ぞと問へばペソシー(女子の名)と答ふ。或日氏は林檎をして、其名を問ひしに林檎と答へぬ。依りてそを造りしもの誰なるやを問ひしに知らず

と答へぬ。試みに靴屋ならずやと問へば然らずと答へ、ペソシ  
ーにあらすやと問へば又然らずと答へぬ。是に於て、他の日課  
を授くべき時は來ぬ。

一日氏は朝早くシルヴェーナスを二階に伴ひ、旭日の東天に輝  
く様を見せつゝ太陽と教へしに又彼太陽と繰返しぬ。依りてこ  
れを造りしものは誰ぞ、神と教へしに、彼は神と繰返へしぬ。  
既にして、氏は該兒を残してこゝを去り、程經て教室に於て再  
び彼に會せしに、彼は殊勝にも窓にもたれしまし、他の兒童を  
慶きて、そは何ぞリチャヤ、太陽へ答へてチャヤ、そを造し

ものは誰ぞ、神と答へよチャヤと、頻りに自己に教えられ  
しまゝの言語を繰返へしつゝありし。此日彼は幾多の兒童を一  
人毎に顧みて、同一の教授を試み、少して倦怠の状なかりしか  
ば、リチャヤ、氏は感極まりて云ふところ爲すと云ふことを知らざ  
りしと云ふ。……(瀧の川學園長石井亮一氏著「白痴兒、其  
研究及教育」一三四—八頁)

誰れかいふ。我結果は我が勞に酬むないと。教  
育は骨ばかり折れる苦業だと。其の人は此の大歡  
喜の寶庫へ入りながら、取り得べきものを自ら取  
らずして不平ばかり云つて居る人である。普通の  
幼兒教育は白痴教育よりらくな丈げ、白痴教育は  
どの大歡喜は得られないかも知れないけれど、他  
の年長兒童の教育よりも一層世話がやけ、餘計に

骨が折れるだけに。それだけ他の教育よりも、  
必ず大い歡喜が得らるべき筈なのである。リヤ  
ー氏程の同情と忍耐と勞力とを以てすれば、どん  
な幼兒に對しても歡喜すべき何かの結果が得ら  
るべき筈なのである。

### △保姆の第一資格

保姆の資格を論じたならば、見方によつて色々  
に言へるであらう。また種々のことが其の必要の  
條件内に數へられるであらう。しかし、保姆の苦勞  
に堪え得る人、保姆の慰勞に満足する人、保姆の歡  
喜を其の第一の歡喜とする人、之れをこそ保姆の  
になれる資格のある人と云ふべきだと思ふのであ  
る。

眞によく之れ等の三條件を具ふる人は、即ち眞  
によく幼兒教育に適し得る人である。何が何でも  
此の三條件に缺くる人は、到底幼兒教育者には適  
しない人である。幼兒教育の學問上の研究者、幼

兒教育の事務上の監督者、幼兒教育の思想上の獎勵者、そういふ人々の資格には必ずしも此の三條件が絶對の必要ではないかも知れないが、併し實際に幼兒に接して、直接に其の教育の任に當る人には、之れが何よりも缺くべからざる資格である。資格などいふ究屈な言葉を用ゐないでも、之れなくして保母になることは其の人の苦痛であつて、之れあつて保母になる時、其の人は最幸福な人なのである。

但し、斯ういふ心を持つて居るだけで、保母の

任務が完全に盡し得るといふ譯ではない。それには保母の素養も要る。保母の練習も要る。保母の經驗も要る。併しそれは保母のハタラクに屬する要件である。いくら此方の條件が具つても其の人が保母になれる人柄でないならば、矢張りほんとうの保母にはなれないのである。即ち之れを保母の第一資格と名づけた譯である。以下保母の第二資格第三資格と順々に考へを續けてゆかなければならない。

## 英文學にあらはれたる子供 (五)

『トム』と『マギー』(上)

東京女子高等師範學校教授 岡 田 み つ

「トム」と「マギー」は「ゲョー・ジョージ・エリオット」(George Eliot)の作 The Mill on the Floss と云ふ小説中の主人公たる子供で「トム」は兄で十三歳、「マギー」は八歳の妹である。

「トム」の歸省——兄妹の對話——喧嘩——マギーの苦痛——仲直り——魚釣

「まあさん僕の衣囊ポッケットに何が入つて居るか分らないでせう。」と「トム」は密かに「マギー」を座敷の片

隅に引き寄せて頭を合頭かせながら「マギー」の好奇心を唆ろうとしてゐる。

「エー、何だか脹れてゐるのネ、兄さん。石弾？ 榛子？」と尋ねながらも「マギー」の心は少し失望した。石弾や榛子で遊ぶと常も自分が下手なので「トム」に詰らない／＼と云はれるから。

「石弾？ ウーン！ 着弾なんか小さい子と皆交換して仕舞つた。榛子だつて實が青い時分でなけりや面白くないではないか。馬鹿だナー。コラ之。」と云つて「トム」は右手の衣囊から何物かを半ば引出して見せる。

「何？ 黄色い處が少し見えるぎりなの」と「マギー」は小聲で囁く。

「あのネーあのー新しいー推量て御覽よーまあさん。」

「當てられないワ。」と自烈たさうに「マギー」が云ふ。

「痛癢を起すならいや。それでは教へて上げな

い。」と「トム」は衣囊に手を差し入れて決心の體を示す。

「ヨー兄さん」と衣囊の中に強直張つてゐる「トム」の腕に絶つて切願るやうに「私怒りはしないの。たゞ當てられないからなのよ。ヨー兄さん愛しくして頂戴よ。」

「トム」は徐々と腕を弛めて、

「そんならソラ新しい釣糸なのさ。二本あるの。一本はまあさんので自分一人限で持つてよいのだよ。之を買はうと思つてね、學校で皆が出し合ひで御菓子を買ふ時にも、仲間に入らなかつたものだから、「ギブソン」や「スパウンサー」なんか怒つて僕と喧嘩をしたよ。之が釣鉤でね御覽……あのネ明日丸池へ釣に行きませう。まあさん自分で御魚を釣るのだよ。餌を付けたら何かしていでせう。」

「マギー」はその返答に「トム」の首へかちり付いて物も云はずに自分の頬を「トム」の頬へ押しあてる

のであつた。「トム」は釣糸をそろり／＼解しなが  
ら暫らくして、

ト「僕は悪い兄さんでせう。まあさん一人限りで  
使ふ釣糸を買つて上げたりして……僕厭なら買  
つて上げなくともいゝのですものネ」

マ「エー真に／＼善い兄さんヨ。私兄さん大好  
ム。」

「トム」は釣糸を衣囊に仕舞つて、釣鉤を一つ／＼  
見てゐたが、やがて、

ト「僕が御菓子仲間入を爲ないので、皆が僕に  
反抗つて來たつけ。」

マ「いやね。學校で皆が喧嘩をしないとよいのに。  
兄さん怪我を爲なかつて。」

ト「怪我なんかするものか。」といつて今度は鉤を  
片付けて、大きな小刀を取り出した。一番大き  
い刃をそろ／＼開けて、指端で刃を撫でながら  
熟々と見て、「トム」は又云ひ出した。

ト「僕は「スバウンサー」の目の處へ必然痣を作ら

へてやつたと思ふ。僕を撲ろうなんと思つた罰  
だ。僕は撲られるのが恐いつて、出し合ひなん  
ぞに加はるもんか。」

マ「兄さんは強いね。「サムソン」見たやうよ。若  
し獅子が出て來て私に吠え掛れば兄さんは其の  
獅子と闘ふでせう。ネー兄さん。」

ト「どうして獅子がまあさんに吠えかゝるの。馬  
鹿だナ。獅子なんか見世物でなくては居もし  
ないのに。」

マ「エー然うだけれど。まあ獅子の居る國に居た  
ら——あの暖い「アフリカ」だつたらと云ふの  
よ。「アフリカ」では獅子が人を食ふのですよ。  
本で讀んだから、其の本を見せて上げてもいい、  
の。」

ト「そうしたら、鐵砲を持つて來て打止めるだけ  
だ。」

マ「だつて、もし鐵砲が無かつたら？二人でそん  
な事を考へないで、戶外へ出るかも知れないで

せう。釣りに行く時のやうに。而して其處へ大きな獅子が吠えながら走つて来てね、而して私達は逃げる事が出来なかつたら、兄さん其時はどうして、」

「トム」は黙つて居た。而して結局馬鹿らしいといふやうに、

ト「だつて獅子が来もしないのに、そんな事いつて何になるの」と云ひながら、歩み去らうとする。

マ「でも、其時はどんなだらうと思ふのよ。兄さんまあどうするでせう。」と「マギー」は「トム」の後をつけて行く。

ト「五月蠅い。まあさん。何て馬鹿なの。——僕は兎を見に行かう。」

「マギー」の胸は心配でドキ／＼して來た。預かつた兎が死んだと事實を直ぐ「トム」に知らせる勇氣もなく、ビク／＼しながら黙つて「トム」の後に歩を運んだ。而して心の中では、兄の怒りと嘆き

を和げるには、何といつて話したらよかろうと案じ煩つて居た。「マギー」は何よりも「トム」の怒りを恐れるので、「トム」の怒りは自分の腹立とは趣を異にして居たからである。

マ「兄さん」と戸外に出てから「マギー」はオツオツ云ひ出した。「あの兎を幾何で御買ひになつて。」

ト「ニクラウス」と六「ベンス」と明白と「トム」が答へる。

マ「二階の私の御金入の中には、其よりかもつと入つてゐるやうだから、御母さんにそ云つて、兄さんに上げて頂くから。」

ト「何だつて？僕はまあさんの御金なんか要らないよ。馬鹿！僕はまあさんよりも澤山持つてゐる。男だもの！「クリスマス」の時にだつて、僕は金貨をいつでも貰ふ。其は今に一人前の男になるからなので、まあさんは女だから銀貨しか貰はないのだ」

マ「エー、だけれど、兄さん！若し御母さんが、

私の御金入から二「クラウン」と「六ペンス」を出して兄さんの御小遣に上げていゝと仰つて、而して兄さんが其でもつて兎を買へば。」

ト「もつと兎を？あの上ひ要るものか。」

マ「でも兄さん、皆死んで仕舞つたの。」

「トム」は、ハタと歩を止めて、「マギー」の方を向き直つた。

ト「御前が餌をやるのを忘れたのだね。而して「ハリー」(召使つてゐる男)も忘れたのだ。」と云ふと共に「トム」の顔に紅がサと汐して、又其が直ぐに退いて仕舞つた。「ハリー」に打掛ぶちかつてやろう！放逐してもらつてやる！僕はマギさん大嫌ひだ！もう明日釣に連れて行かない。僕は毎日兎を行つて見て呉れといつたのにと。「トム」は歩を續ける。

マ「エー、でも私忘れたの。ついなのよ。眞實ほんとに兄さん、堪忍して頂戴な。」と「マギー」ははや涙

が瀧と流れる。

ト「まあさんは不良いけない子だ！釣糸なんか買つて上げて惜しい事をした。僕はまあさん嫌ひ」と「トム」は手痛く云ひ放つた。

マ「兄さん非道ひどいわ」と嗚咽しながら「兄さんが何か忘れても、私は勘辨するのに！兄さんが何かしたつて、私はちつとも構かまやしない。勘辨しやつぱり、兄さんを好いて上げるのに。」

ト「だから馬鹿なのだ！僕は決して物事を忘れるはしない——僕は忘れやしない。」

マ「勘忍して頂戴ヨ。兄さん！胸が裂けさうだ」と「トム」の腕に縋り付いて、其肩に涙だけらの頬を載せて、啜り上げ／＼泣き入つて居る。

「トム」は其を振り放して、立ち止まつてキツパリと、

「マギさん、まあ御聴き！僕は良い兄さんでせう。」

マ「エッエッエッ！」と「マギー」は吃逆しゃやくり上げな

から答へる。

ト「此學期中釣糸の事を考へてゐて、よく御金を溜めて御菓子を買ふ仲間にも入らないでゐるから「スバウンサー」が僕と喧嘩までしたでせう。

マ「エツエツ！其だから、兄さんをダ、ダ、ダイ好きなのよ。」

ト「其でもまあさんは不良い子なのです。此前の休暇の時には、僕の御菓子の箱の繪具を嘗めて落して仕舞つたし、其又前の休暇には、僕が釣糸の番をしてゐて呉れといふのに、其をポットに曳きづつて行かせたり、僕の紙鳶に用もないのに頭を突き入れて、破いて仕舞つたではありませんか。

マ「態としたのではないの。ついでだワ。」

ト「ついではない！自分の爲て居る事にチャンと氣を付けて居れば、其様な事はありはしない。

いけない子だもの、明日一所に釣りに連れて行って上げない。」

と恐ろしい結着をつけて、「トム」は「マギー」を捨て、走り去つた。

「マギー」は、一二分間は噉り泣きながら身動きもせず佇んでゐたが、急に踵を回らして一散に家へ駆け込んで、屋根裏の物置きへと入つた。此處で床の上に坐つて、虫蝕だらけの棚に頭を倚らせて遣瀨のない嘆きに暮れた。兄さんが學校から歸省してさぞ嬉しかろうと思つたに、兄さんは實に非道い！兄さんが可愛がつて下さらなければ、何も楽しみもない！あゝ兄さんは酷い！自分は御金を上げますといふのに、而して申譯がないといつて詫びるのに！自分は、母さんには腕白をいふが、兄さんに腕白をした事はない……腕白をするつもりは嘗てない！兄さんは非道いと物置のガラんとした空間に響く反響に一種の快味を覺えて、聲を立て、泣いた。

やがて「マギー」は物置きに數時間も籠つて居た氣がして、もう夕飯の時刻だらうに、皆が夕飯を



食べてゐて、自分の事を思ひ出して呉れぬの知らん。其れならば構はない。此處にゐて餓死するから。桶の蔭にひそんで夜通し此處に居てやろう。すると皆が騒いで兄さんだつて後悔するだろうと。桶の後ろへ潜り込みながら意地強く考へた。だが又暫時して、皆は自分が此處に居るのを、平氣で居るかと思つて涙が出始めた。今兄さんの處へ下りて行つたら、勘忍して下さるだろうか。御父さんが傍に御在で、大方自分の味方になつて下さるだろう。であるが、兄さんが自分を可愛いと思つて勘辨して呉れるのではなくては厭だ。御父さんに云付けられて、勘辨するのなら詰らない。止さうと、兄さんが迎に來て呉れる迄は下へは行くまい。と此の決心も桶の蔭で、眞暗な五分間位だけ非常の力で繼續したが、「マギー」の性質にとつて最入用な、人に可愛いがらきたいとの念が、その傲慢心と相撲を始めて、とうとう愛を欲する念が勝利を占めた。「マギー」は桶の後ろから、物置

きの薄明るみへと這ひ出した途端に、階段を足早に上つて來る足音を耳にした。

「トム」は「ルーク」を相手に話をしたり、構への周圍を廻つて見たり、好き勝手に歩き散したり、唯譯もなく木片を削つて見たり、其や之やに心を奪はれて「マギー」の事も、怒られて「マギー」が如何したろうとも思はないで居た。「トム」は「マギー」を懲らしてやる積りで、懲らすといふ仕事が終われば、自分は他の用事をするといふ如何にも實際家であつた。併し夕飯に呼ばれて入つていつた時に、父は「オヤ！あの子は何處にゐる」と聞き、母も同時に「お前の妹はどうおしたへ」と尋ねた。——両親は、兄妹二人今まで一所にゐるものとのみ思つてゐた。

「僕知りません。」と「トム」は云つた。「マギー」に立腹はして居ても、告げ口をする氣はなかつた。「トム」は義ある男兒であつたから。

父「何！先刻からお前と一所に遊んでゐたのでは

ないか。あの子はお前の歸つて来るのばかり、  
楽しんでゐるのに。」

母「ソレヤ大變だ！きつと川へ落ちたのですよ」  
と母親は坐を立つて、窓へと飛んでいつた。「ど  
うしてお前はそんな事をさせて御呉れだろう」  
と狼狽へた婦人の常で、覺えもない人に、分り  
もせぬ事を咎め立てしてゐる。

父「イヤ／＼溺死なんぞするものか。トム！お前  
が苦めたのだナ。」

ト「お父さん。僕は責めはしません。全くです。  
家の中に居るのでせうよ。」と「トム」は激してい  
ふ。

母「大方物置きだろう。黙つたり、獨言をいつた  
りして、御飯時も何も忘れてゐるのだらう。」  
父「トム！いつて連れて来てやれ」と詞鋭く父は  
云つた。炯眼かはた「マギー」を秘藏に思ふ心根  
からか、父は「トム」があの子に辛く當つたの  
で、さもなくば「マギー」が兄の傍を離れる筈は

ないと鑒定した。「親切にしてやれよ。分つた  
か。さもないと了見があるぞ。」

「トム」は父親が專斷な權柄な人なのを知つて  
ゐるから、父の命には背いた事はなかつた。が不  
平な顔をして、葡萄入の御菓子を携へて出ていつ  
た。「トム」は「マギー」の罰を緩めてやろうなどの  
氣は更にないので、「マギー」が情ない目に遭ふの  
は當然至極だと心得てゐる。

「マギー」が可愛がつて欲しさに思ひ餘つて、  
驕りの心を抑へて、今や泣き腫した眼にも、亂れ  
た髪にも頓着なく、哀を乞ひに下りてゆかうとし  
た時に、階段に聞こえたのは正しく「トム」の足音  
であつたのだ。「マギー」は「トム」の足音を知つて  
ゐるので、遽に嬉しさに先胸を轟かせる。「トム」  
は唯階段を上りきつた處に佇立して、「まあさん、  
下りて御出でとさ」と云つたぎりであつたが、「マ  
ギー」は走り出て、兄の首筋にからみ付いて啜び  
泣きながら「兄さん！勘忍して！私堪らないワ！

之から氣を付けるから…物忘れしないやうに…御願ひだからやさしくして…ネーどうか兄さん」と云ふので「トム」の心にも、「マギー」の撫愛に感應するやさしい心の糸がないでもないから、「マギー」を相當に懲らしてとの最前の決心も弱つて、我にもあらず「マギー」に頬すりして、「まあチャン。もう泣くの御止しネ…さ…さ…この御菓子を少し御上り。」

「マギー」の泣くのも少し静まつて、やがて口を差し伸べて一口食べた。「トム」も御愛想に一口食ひかいて、互に頬を擦り鼻を突き合せて、彼れ一口我一口と食べるのであつた。其も盡きて「トム」が「ゆかうまあチャン御夕飯に」と誘つた。之で悲しかつた此日も果てたのである。

翌朝「マギー」は片手に自分の釣竿を、片手に籠を下げて出かけた。得意の技術を現して例の通り路の一番悪い處を惡るい處をと歩いてゐたが、當人は「トム」がやさしくして呉れる嬉しさに、

帽子の下から笑顔を見せてゐた。而して「トム」に釣鉤に餌を付けて呉れるやうにと頼んでしまつた。兄は餌にする蟲は感覺が無いものだといふから、眞實だとは思ふが、やはり手に觸れたくは無かつたのである。「トム」は餌だの魚だの何かをよく知つてゐて、どの鳥は害をするとか、海老錠はどうして明けるものとか、門の取手はどつちへ振る者だとか心得て居るので、其が「マギー」の目からは驚嘆すべき智識で、「トム」の立ち優つてゐるのが恐ろしかつた。而して「マギー」の知つてゐる事を下らないと酷評して、利口だなどと頌めて呉れぬのは、實際兄一人であつた。「トム」は又「マギー」を、愚かしい子だと思つてゐた。女の子は一體皆愚物で、物に當る様に石を投げる術も知らず、「ナイフ」の使ひ道も分らず、而して蛙なんかを恐がる厄介者だと思つた。併し妹の「マギー」は可愛いので、一生涯面倒を見てやつて、自分の家を取締をさせて而して不都合な事をしたらば、罰し

てやろうと考へてゐた。

今二人は、九池として昔洪水の時に出来たといふ池へと、指して行くのであつた。此池は測り知られぬ程深く、その形はほと／＼圓形をなしてゐた。周圍には柳の樹や丈の高草が取り巻いてゐて、よく／＼水の縁に近よらなくては、水面は見られぬのであつた。此處は「トム」の大好きな遊び場で、此處へ來るといつも上機嫌であつた。今も大切の籠を明けて、釣道具を支度をしながら、何くれと睦しく「マギー」に囁き／＼、「マギー」の釣糸を投げ入れてやつて、その手に竿を持たせてやつた。「マギー」は自分の釣に、小魚が掛つて、「トム」のには大きいのが掛る事だと思つてゐるが、其の内に魚の事も何も忘つてしまつて、鏡の如き水面を夢心地に眺めて居ると、「トム」は囁く聲に力を籠めて、「まあさん御覽！御覽！」といつて「マギー」が糸を引放さうとするのを止めさせやうと走つて來た。

「マギー」は、例の如くまた何か不始末を仕出したかと、愕然としたが、さうではなくて、「トム」が糸を引上げて呉れると思つたら、大きな鯉が一尾草の上に跳ねた。「トム」は夢中で「まあちゃんよ！子！大出來！籠を空にして御呉れ」と怒鳴つた。

「マギー」は格別手柄をしたとも自覺しなかつたが、「トム」が「まあちゃん」と呼んで呉れて御機嫌なのが嬉しかつた。「マギー」の心では、叱られるといふ事がなくて、この寂寞の中にじつと坐つて、水面に上つて來る魚の軽い音や、柳の木や葦が水と内所話をしてゐるやうなサヤ／＼いふ音を聞いてゐるのは、極樂のやうだと思つて居たので、魚が掛かつて「トム」が知らせて呉れるまでは氣も付かなかつた。それで居て、「マギー」は釣りは大好きだといつてゐた。(つづく)

# 小兒の傳染病

(その四)

醫學士 石 塚 保 吉

## △百 日 咳

百日咳は時期を撰ばないで起る傳染病であります。やはり呼吸器病の多い寒い時分、即ち冬から春にかけて多いのであります。随分擴がつて居る病氣で大抵の人は一度かゝると云ふてもよい位であります。麻疹と同じやうな勢をもつて居ります。年齢も多くは一歳から三歳位の時が數では一番多いが、如何なる年齢でもかゝらないことはない、生れて十日目位の子供も罹れば、大人も罹ることがあります。今迄大人にはないやうに云はれて居つたのであるが、大人が罹ると子供のやうに劇しくなく、割合に早く癒るから百日咳ではないと思はれて居つたが、實際は子供と同じやうに、その咳をする場合が多いから、やはり大人も百日咳に罹ると云つてよいのであります。

大抵の傳染病は、極小さい子供はあまり罹らない、このはつきりした原因はわからなかつた。多分親の免疫が一定時間は傳はつて居るためであらうと思はれるが、此の病氣ばかりは生れたての子供でも罹る。

傳染の仕方は非常に猛烈で、一家に一人あると同胞十人あれば十人皆が皆、一人も残らず罹つてしまふ。そういふ時に乳飲兒があるとやはり移る。ほんの一寸の間、咳をする人の傍に居つたり、見舞に行つて二三分話をしたりして移つて歸るので非常に恐ろしいのである。それで移つても一週間位わからないうで、それから發病する。併し此の百日咳は人々が皆よく知つて居る咳であるが、始めからあのやうな咳をするのではないので、それ／＼時期がある。始め一二週間はカタル期と云つて、

その時分は普通の風をひたい時位で少し咳が出る、又眼が赤くなり、鼻汁が出るといふやうに粘膜のカタルと同じで、外のものゝ區別が出来ない。

たゞ外のは手當をすれば癒るが、百日咳はカタルの手當では癒らないのみならず、症状が増して、だん／＼百日咳らしくなつてくる。即ち咳が間を置いて、發作性になり、強くなつて痙攣期に入る。百日咳の事を痙咳といふ位、痙攣性を帯びて居るのである。その時期になると、特有の咳になります。御存知の通り細かい咳が重なり、子供は眞赤な顔をして非常に苦しうで、息が塞つて吸氣をしないから、唇が紫色になる。それがすむと特有の深くあると引く息をする。我々の方ではそれをメプリーゼと云ひます。それがすむと一度止みます。發作と發作との間は、それ程苦しまない、殆んど平常とかはならない、今迄苦しんで居たと思ふと、子供はすぐ笑ひかけたり、遊びに出かけたりする。咳の時は粘ばり氣の強い透明な痰

と、唾の交つたやうなものを口中に出す。とつてやると長く引いてとれます。そういふ發作は晝より夜の方が多く、回数も輕いうちは四五回から十回位、重いになると四十回、五十回になります。かういふ風で二三週間續いて輕快期に入ります。即ち漸く回数も遠ざかり、一度の強さも減じて周圍の人もやつと安心することが出来るといふやうになります。

此の病氣はそれ程いやな病氣で、心配されるが豫後は悪くない、生命に係る程ではないので、多くは助かります。併し哺乳兒が罹ると必ず肺炎或は腦膜炎を起して、助からないのであります。

豫防法は、流行時は殆んど手段がないと云つてもよい位、盛に移りますから、一切外へ出さないで居る外はない。若し一家のうちに入つて來たと思ふやうであつたら、直に外に子供を移さねばならぬ。

手當法は御承知の通り、確實な療法はまだない

のであります。我々の方では一番いやな病氣で薬も方法も澤山あるが、これなら療るといふのはない。併し昔よりは進歩して居るので全経過を三分の一位に縮め、苦しみを少くすることは出來ます。一種の黴菌のために起る病氣であるから、普通のカタルの様に、寒い處に出てはいけないとか、室を暖めるとか、湯に入つてはならないかと云ふことはない。却つて天氣でもよければ庭へ出て清い空氣を吸ふ方がよいのであります。吸入も普通のカタルの時と違ひ、石炭酸の極薄い液を用ひてするのである。それから病室の空氣を消毒する意味で、石炭酸を布片に浸して室内に掛け又は、クレオソートを綿に浸して糸で寢臺の下に吊して、室内の空氣を清潔にする法もあります。空氣をきれいにする必要がありますので寒い時分は二室療法をすることもあります。それは病室を二つ拵らへ、寢臺、寢衣等すべて二通り備へて室を交換して使ふのであります。一日一方の室に居つて、その間

一方の室は明け放ち、寢具、衣類すべて日光に曝して消毒し、翌日患者を裸にしてその室に移し、今迄居つた室を同じやうに消毒するのであります。

普通の氣管支カタルは湯に入るは禁物である。實驗上たしかに悪いのである。室内の溫度が一定して居ればよいが、斯ういふ吹き驟しのやうな家では、どうしても風をひくからであります。處が百日咳の場合は湯にはいつでも構はないのであります。

百日咳自身には熱はないが、若し熱が加はると餘病が起つた證であるから特に注意して醫師に尋ねる方がよい。若し餘病に肺炎が起ると、普通の肺炎より質が悪いから注意して防がなければならぬ。又結核が起ることが屢々ある。永い間の咳で呼吸器が傷むで居るから、若し結核の素質があると、眞物にある。百日咳と麻疹とは仲がよく、續いて起ることがよくあります。兩方をすると更に續いて肺炎をすることが屢々あります。昨年

も此の近所で、一家に三人の子があつて、三人共順々に此の三通りを病んだことがありました。これ等の病氣の間に密接な關係があるのであらうと思はれます。

#### △腸チブス

大人の傷チブスは随分面倒なもので、非常に恐るべき病氣としてあるが、子供の傷チブスは割合に軽く、手當さへよければその爲めに生命を失ふことはあまりない。症状も、態も大人のとよく似て居ります。即ち主なることは熱が出るのである。二三日工合が悪くつて後熱が暫く續き、漸々下つてなほると云ふのが大人のと似て居りますが、大人のは四十日もかゝるが、子供のは三週間位で済みます。熱もそれ程高くなり、いやな腸穿孔とか、腸出血とかはなく、脾臓が腫れたり、薔薇疹等のこともない。併しそれがため診断は難しいので、最も確實な診断法はチブスの凝集反應を試みるのである。斯くの如く子供が此の病氣になると徴候が

ないから、ある時はインフルエンザと間違へられたりその外盲腸炎と間違へられることがあるが、氣をつけてみればわかるのであります。

大人のチブスと同じく食物から入るのであるから、患者の汚物を洗つた水に關係したものを口に入れないければ移らないのである。故に近所にある時は、生水を使はないとか、近よらない様にするとか注意すれば免れることが出来る。

斯ういふ病氣の時には特別の薬はないので、ただ病氣の番をして居つて、自然の経過を待つ、即ち待期療法より外はない。多くの人は熱を恐がつて熱さましを呉れと云ひますが、薬を用ひて熱を下げるのはよくないのでありますから、濕布をする位の手當をして置くのであります。注意すべきことは食物で、必ず流動食にすることを嚴重に守らなければならぬことは、大人の時も同じであるが、子供の時にも殊にそれを守らなければ非常な過ちを起すのであります。バラチブスは腸チブス



の今少し軽いもので、微菌が違ふのでありますが、特にお話する程の必要はありません。

腸チブスも、バラチブスも熱ばかりが主なる徴候であるから診断が難かしいので、すべて斯ういふ病氣は診断を確實にしないで、手當の方法は大抵一致して居るのでありますから、若しそういふ病氣にかつた時は、診断をやかましく云はないでも、過ちはないのであるから、痛い思ひをして發泡を貼つたり、手敷をしたりしないでも、醫師に任せて安心して居る方がよいのであります。

#### △疫 痢

これは春から夏にかけて非常に多い病氣であります。病原に就ては今なほ議論が喧しいので、或は大腸菌と云ひ、小兒赤痢と云つて居るが、原因はとにかく、一種かはつて猛烈なる病氣である。此の病氣は哺乳兒は決して罹らない。三歳位から十歳位迄つまり普通の飯をたべるやうになつてからの子供が犯されます。殊に平生非常に丈夫だと

云つて誇つて居る人は、いつも丈夫に任せて食物が亂暴になるからであります。昨年もつい近くの三歳位の子供が、櫻實を兩手に一杯盛つて二度もたべたといふやうな亂暴から起るのであります。

此の病氣も徴候とするものがない。たつた今迄元氣で居たものが、一眠りすると忽ち四十度位の熱が出て非常に驚くことがある。精神がぼんやりして、急性の中毒症状を起し、腦膜炎のやうになつて來ます。下劑をかけると、澤山の不消化物を排泄し、後から非常にいやな臭のする粘液便を多量に出す此の病氣は非常に恐ろしいので、前晚の夕方が始まると、翌朝はもう痙攣を起したり、心臟麻痺卑を起したりして亡くなつてしまふ。その早いこと實に驚く程である。腸の中に微菌が急激に繁殖して猛烈な毒を吐き出し、その中毒に由つて起る病氣なのであります。

療法としては、その毒を一時も早く排泄するよ

り外ないのであります。始まつたらその夜を過さず醫師にみせて手當をしなければならぬ、明日になつたらなどと云つて居るともう手後れになつてしまひます。此の病に罹つたら殆んど絶對に望みはないと書物にある位なのであります。熱が出たら直に醫師にみせると、醫師は腸を洗ひ、下劑をかけるといふことが唯一の療法である。洗腸

も普通は五百位と云ふ處を三千、四千、若くは五千と云ふ位、澤山の水を入れて洗ひ、二時間か、三時間置きにそれを繰り返し、一方に下劑をかけて上の方にあるものを排泄し、なるべく短時間にすかり排泄させてしまへば、生死の境を脱するこゝとは出來ます。それから癒るまで一月位はかかるのであります。

## 家庭教育 手工應用 玩具の造り方

英國手工視察員 デョーデ、デヨンソン著

東京女子高等師範學校助教授 藤 五代 策 譯

はしがき

「家庭は子供の懐く様にせねばならぬ」と云ふ諺がある。何んな子供でも物を造ると云ふ嗜好を持つて居る、而して此の嗜好は良い家庭に於ては或る程度までは満足されて居る。然るに現今一般

の家庭を観るに、技巧を凝した玩具に随分餘計な金をかけて居る様であるが、之は徒らに子供が自身で自身の玩具を作つて試やうとする貴重な機會を奪ふ様なものである。今日の玩具の機械の如き

は彈條を卷きさへすれば獨手に動き、軌道は只繼ぎ合せさへすればちやんと出來上るのであるから、子供は毫しも頭腦を働かせない。之れでは子供に玩具を買つて與へる眞の目的を達したとは言へない、寧ろ簡單な方法を授けて自分手に工夫させて造らせるに如くはない。而したら勢ひ自己の希望を達せんが爲に色々と考案を廻らす事になるから、子供の想像力の鍛練にもなれば、發明的、構造的智識の涵養にもなり、併せて時間、金錢の貴重なる事を覺る様にもなり、其他様々なる智識良習慣を得らるゝ様になる。此の書が生れたのも全く家庭に此の種の趣味を進め度いと著者の熱誠に外ならぬ。蓋し本書の徳義上、社會上の價值は一般の手工教授書と同一の選に非ず、説く所の方法は極めて斬新で、如何なる子供にも適し、其の材料は極めて廉價である。試みに愛子に材料と本書とを與へて無駄な時間を愉快に、有益に利用せられん事を望む。

## 特色

本書に説ける玩具は大概燐寸棒や、被せ板を用ふるのであるが、之等で作つた品は非常に堅牢で、到底紙や板紙の及ぶ所でない、而して出來上つた品は以前の紙を裁つて作る方法で出來た品よりも遙かに實際的で且つ實體的である。

今一つの明かな利益がある、それは卓子だとか秣槽の様な玩具は實物を作ると同じ方法で作る事が出來るから、子供は實物の紛雜だ組立を譯もなく想像する事が出來る。更に例を引いて説けば、箱の如き極めて簡單な玩具を造るにしても、紙や板紙で造るには底面、側面、蓋等を豫め平面に描いて置いて然る後折り上ぐればちやんと箱が出來る様に造らねばならぬのであるが、幼稚な子供の頭では中々此の設計をするのは六ヶしい、所が之を被せ板で作る時は實際の箱と同じ様に板を一枚々々取り離して作るのであるから、雜作もなく考案が浮ぶのである。

本書に掲ぐる所の圖解の寸法は只其の觀念を興へるに止まつて居る。何故かと言へば一定の寸法、一定の形式によりて玩具を作らせるのは不必要の事でもあり、又餘り好ましからぬ事でもあるからである。又或る場合には全く寸法を與へずに雛形のみを示して、それを手本として作らせ、又は自己の考案によつて作らせる等も利益があらう。

材料と用具

- 一、燐寸棒。普通用ふる燐寸よりは太くて、長さも四寸五分許りある。家で作つても餘り手間の取れるものではない。
- 一、被せ板。松の材で作つたのが宜しい。但し折詰の空箱を利用するも宜し。

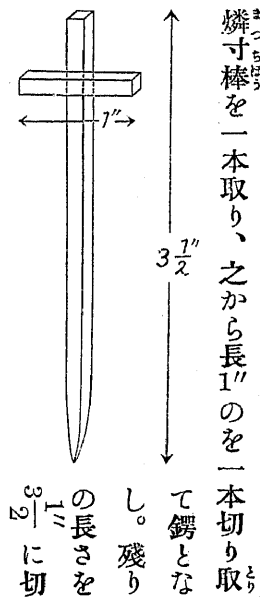
一、膠

一、紙と板紙。或る玩具には紙や板紙を用ふるものもあるが、被板の手に入らぬ地方では被板の代用とするも宜し。

一、小刀と鋏。普通のもので差支へない。

一、留針。

第一圖 劍



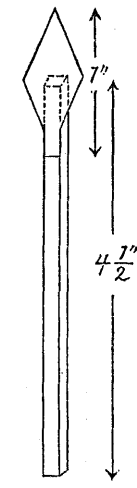
り、其の一端を削りて尖らし、他の一端から凡そ1ミ位の所に劍の身と直角になる様に鏢を膠で附着する。そこで注意せねばならぬのは、鏢が一方に出過ぎたりなんかしない様に恰度平均させる事である。

(注意 圖解中吋は(ハ)を以て表し呎は(ア)で示す。併し吋は寸とし呎は尺としても宜しい)

第二圖 槍

燐寸棒を(ハ)に切りて槍の柄となし、穂は被板又は折詰の空箱を長(ハ)幅は見計つて釣合の取れる寸法に裁ち、之を柄の頭部に附着するのである。

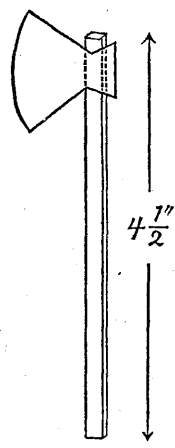
穂の附着方法に今一つある、それは柄の一端を切



口から木理に添ふて

少し許り割き、其の割目に穂を挿みて膠を着けるのである。

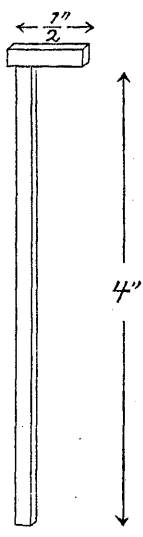
第三圖 斧



燐寸棒をハミに切り、程よき被板を

取りて圖に示せる如く柄の長さと同合ふ形に裁ち、前の槍と同じ様に柄に附着するのである。

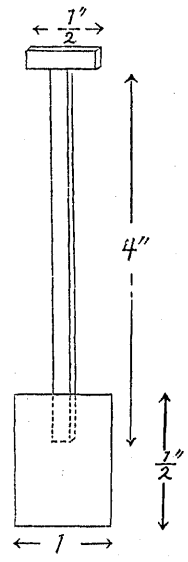
第四圖 ステッキ



圖の寸法によりて二本の棒を作り、之を膠で附着

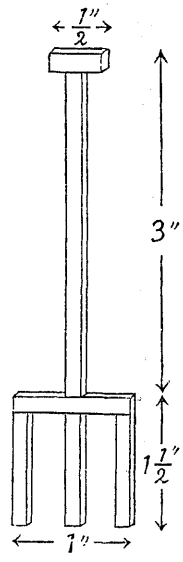
するのである。

第五圖 踏鍬



柄の部分は前と同じ方法で作られ、被板を木理に添ふて長ハミ幅に裁ち、之を膠で柄の下部に附着する。鍬に少し許り踏をつけるには柄の下部を具合よく斜に削り去りて然る後に鍬を着ければよろしい。

第六圖 庭かき



柄は前と同じだが併し長さをただ短かくすること。それだ出来たらハミのを三本と、ハミのを一本作

り。Lミのに他の三本を圖に示すが如く同じ間隔で又またに附着する。そこで前の柄を此の又またの中央に附

着するのであるが、脚かの端は削つて稍尖らしてもよい。

## 保育の此頃

神戸幼稚園保母 佐藤 満壽

近來教育界上の新問題として其名高きモンテッソリー女史教育法は其感覺練習に於て筋肉教育に於て將又賞罰なしの訓練に於て其の効果著しきものあり而て女史がかくまで偉大なる効果を擧げ得し功績は實に我教育界の一大光明なりとす。されど同方法を我國保育に應用するに當りて尤も心すべきは徒らに方法のみを倣ひて女史の精神を忘るるなからん事にこそ。

されば我神戸幼稚園に於ては同方法の應用の第一着として二三ヶ月來試みつゝある所を少しく左に記さん。

### ○感覺遊

幼稚園時期に於ける感覺練習は尤も必要にして此時期に於て諸感覺を練習せざれば成長の後此諸感覺は十分なる發達をなす能はずこれ實にモンテッソリー女史が意を特に此時期に於ける感覺練習に用ひる以所なりといふべし。

一、視△△△覺練習としては石、貝、大豆、小豆、ドングリ藤の實、桐の實、ユウカリの實等の自然物及木片、金輪、等の材料を二種或は三種を混じたるを分類せしむる場合あり。又はボール紙にて次第に大きさを減ずる所の圓形（最大を直徑三寸五分とし最小を直徑四分とす）十個を作り、各半面は同色の色紙を以て貼り他の半面は各々異りたる色紙

を以て貼りたれば幼児は之を使用する場合同色の面を用ひて最大のものより最小のものに至る迄順次に並べ又は重ぬる事によりて其大さの差異を覺ゆる事を得しむ又は相異りたる色の面を開ひて色の區別を知らしむる事を得。

二、觸覺練習としては數個の布袋の中に各異りたる物品（視覺練習に用ゐたると同一の材料）を入れた袋の口を閉ぢ之れに觸れしめ其何物たるかを當つる方法にして此等當るものも當てしむる者も幼児自らなさしむる事とせり。又幼児をして目を閉ぢしめ種々なる物品に觸るゝ事により其物の名稱或は形狀粗滑等を知らしむるが如き練習より始め次第に進みては一個の箱の中に數種の材料を混じりて幼児は目を閉ぢて各材料を別々に分類するに至る。

三、聽覺練習としては樂音を辨別せしむるの必要あるを以て今其樂器を製作中にあり。

四、重さの感覺練習としては二個の物體を持ち較

ぶる事により其何れか重きかを當て更に其誤ならざるやを確めしめんがために輕便なる天秤を作り幼児自ら二個の重さを實驗し得る事とせり。

#### ○糸卷遊

筋肉練習の必要なる又言を俟たず即ち基本的より部分的に及ぼすの方法として之を糸卷遊に課したり。

六寸四方の板の角々に短き棒を立てたるものを作り幼児をして此棒に糸を巻きつけて糸のかせを作らしめ之れによりて肩の筋肉運動をなさしめ次には四方形の糸卷にかせとなしたる糸を卷かしむる事によりて手腕の運動となり更に二寸形の糸卷に卷換ゆる事によりて手首の運動となり又更に小さき花形の糸卷に糸かゝりをする事によりて指尖の運動をなさしむるなり此遊は一見興味なきが如きに似たれども之を糸卷競争又は糸かけ等の遊と連絡して面白き遊となる。

#### ○自然遊

學校兒童の成績調査を見るに幼稚園を経たる兒童は之を経ざる者に比して凡ての點に於て優ると雖も獨り數學に於ては互に優劣なきを認むこれ幼稚園に於て數的練習に乏しきに依ると云はざるを得ず此缺點を補はんが爲めに自然物を應用して興味のうち自ら數的觀念を養はしめんとて次の如き遊を試みたり。

幼兒をして特に一定の時間を限りて庭園に誘ひ動物礦物等に接近せしめ之に就て新に作りし數札（一より十に至る數を各札に色圓形紙を貼りて數を表はせしもの）を與へて各兒に其札に表はれたる數だけ自然物を採集せしむ（此數札は自然物に限らず他の遊にも使用する事あり）此他自然物を利用するの遊數多けれど之を省略す。

○日々の行

幼兒自ら着物を着又は脱ぐ等日常生活に慣れしめんがため幼兒自ら手拭のかけはづし足袋のぬぎはき紐結び室内の掃除等の練習をなす此遊は幼兒

の好む所にして競争に用ふれば一層興味あり又幼兒と同等の大きさの人形を作り之に衣服を着せしむる等の遊をなさしむる事あり。

以上述ぶる所はモンテッソリー女史教育法の應用の一端に過ぎざれど我等は之によりて従前の保育法の足らざるを補ひ得ると信するなり。而して實施以來日向淺くして著しき結果を見ずと雖、自然遊の結果として幼兒自ら數に就て興味を感じ之を凡ての遊に應用するに至り又日々の行の遊の結果として園内に於ては手拭類の紛失少なく履物を整ひ自らの事は自ら辨する事に興味をもつに至れり。かくの如く指導する保母も亦己が期する所が不知不識の間に幼兒に影響するを思ひて思はず愉快を呼ぶに至る。嗚呼美はしきかゝる天職を與へられし我等保母は幸なる哉。

神戸幼稚園に於けるモンテッソリー研究の熱心は關西に有名なるものであります。則ち切に乞ふて此の報告を本誌に掲載することと致しました。（編者）



# 元良先生と坊や

若　　き　　父

一週間に亡くなられた元良先生の追想に耽りながら、本郷のアスファルト街を、美濃屋の前から四丁目の方に向つて歩いて居る時に、それからそれへと引續いて發展して去來する聯想の心像の變化を、其の推移の儘に任せて眺めながら、或る處まで來て、ふと次のやうな考が浮んで來た——「自分の考へと手とを働かせて、相應に苦心もし勞力をもかけた物を、クリスマスのご贈物として、坊やに拵へて上げやう」。それは、時雨れてドンヨリした寒い十二月十九日、木曜日午後三時頃であつた。

此の思ひ付きが意識の水面に浮き出して來るに就ては、其由來も原因も、それ／＼相應にある事であらう。又浮き止るまでには、其水面下に於ける意識要素の經過なり離合なり發展なりも、それ相應に見出し得べき事であらう。若しかう云ふ心理的の聯想の關係を、維也納派の學者のするやうに、苦しいのを我慢して、無理やりにつれた縫糸の小口を探し出し選り分けて、それからそれへと探索して行たならば、或は自分にも意外な感じのするやうな、いろいろ／＼な興味ある事柄が、たゞり寄せられて意識の水面に引上げられて來る事であらう。しかし今は、そんな面倒な事を深く考へ込んで居る餘裕がない。自分は本郷の片側町の寂しい歳末の光景を眺めながら、俯向き勝ちに急いで歩いて居るのである。

此の日は、いろいろ／＼な買物を彼方此方して來た爲めに、二重マントの隠しや袂や、左手に持た風呂敷包などが、次第／＼に膨張して且つ餘程込み合つて來た。風呂敷包が殊に大事さうに且つ持にくさうに、或は抱へられたり或は下げられたり、いろいろ／＼に其の持ち方が變化され調整され、換言すれば、自分がかなり是を持ちあつかつて居ると云ふ事は、寧ろ路を行く人の注意を惹くよりも、自分の興味を喚び起すに足りる丈けの材料が、此の風呂敷包の中に籠つて居る。

今日は、自分の教へて居る學校に教育史の試験が有つた。コメニウスの教授の法則と學校系統論」と言ふ問題を出して、其答案が風呂敷包の下敷と成つて、此のクニヤ／＼した下敷の上に、いろいろの品物が重り合つて混亂して包み込まれて居る。例へば文房堂で買つた繪具クリッシュの瓶と皿と刷毛、堀津で求めた練香、菊屋で取寄せた十二律の調子笛、池の端の坂毛登で取つた小倉山青木堂のキンヤ煎餅、袖珍本の伊蘇舊物語と此の物語の繪本、坊や用の小さい靴下にカパーに手袋、瓦斯暖爐のゴム管などが各々其個性の自由なる表現を盡して、自分と坊やの官能と趣味とを有効に且つ豊富に刺戟するに足るべき形式に配到せられるやうに互に競争して居る。是を自分ばをしながら、コメニウスの地盤に乗せて、且つ無造作に黒い風呂敷に包んで四つに結んでしまつた。

此の風呂敷包を左手に抱へた時の觸覺と運動感覺から来る印象は恰も小さい黒猫を五六匹包んで抱へたやうな、グニャ／＼した不安な無氣味な運動の感じを與へて、自分は忽ち是を下げるやうに持ち直す。然るにコメニカスの立場が少し軟か過ぎる爲に、其上に混亂して重り合つて居る色彩、調音・芳香・甘味・溫暖と云ふ様な官能的の材料の容積と重量との均り合を、巧みに調整する事がどうしても困難になる。従つて下げた時の印象もやはり内容の重さの平均が取れない、極めて不安定なものと成つて来る。

俯向いてアスファルトを視凝めて歩いて居るうちに、元良先生と坊やとはすぐに連絡された。長方形の堅い鼠色の定規に、赤い△チムチした護謨毯を結び付けたやうな、茫漠とした浮動した心像が、アスファルトを背景として最初に現はれて来た。やがて其の心像の輪廓も色彩も次第に明かに發展し、運動も音聲も追々鮮がに分化して、定規と護謨毯とは、更にもつと具體的な心像と成つて固定し、背景も判然と見えて来た。斯して脱俗した枯淡なる哲學者と、若い軟かい肉のみなきつた嬰兒とは、最も鮮かなる記憶の心像と成つて、自分の經驗に登つて来た。實に先生と坊やとは、次に述べるやうな唯一つの場合に於て、最も明確に結び付けられたのであつた。

明治四十四年の五月、即ち、坊やが満一歳半の時であつた。乳母車に坊やを載せて、それを母さんと叔母やんとて押しながら、大學で催された講演を皆まで聴きに行つた事があつた。此日先生は「初等生物の心」と言ふ講演をされた。晩方に成つて御話が濟んでから、歸り支度をしながら、喫茶所に小なる一家族が勢揃ひを

した。坊やは母さんに抱かれて居た。そしてお湯を吞まうとして、手を机の上の茶碗に延ばしかけた時に、黒外套を着て茶色の中折帽を左の手に持つた元良先生がスーツと入つて來られた。今迄屢々御見掛けはしたけれども、——御見掛けしたのみではない、四十年の七月初旬であつた、自分達が東片町に引越をした日に、市會議事堂で低能兒教育用の練心器の説明をされる時の助手を自分に頼む爲に、先生は御自分で尋れて來られた事が有つた、玄關と言はず座敷と言はず、引越しの道具で一杯に取散らしてあつたので、自分ほどぎまぎしながらまゐどうぞ………」と言つた切りで見事に立往生をしてしまつた。此時、自分の暗示を期待しつゝあつた主婦は、障子の蔭で久しい間出やうか出まいかやはりまごまごして居て、とう／＼機會を失つて出ずにしまつた事があつた。其後、やはり正面から母子共に一度も御挨拶をする折がなかつた。

今此の喫茶所の場面を構成して居る各要素を通覽して、先生は忽ちに相互の關係を直觀された。しかも、坊やの衝動的な意志行為が、オプー(お湯)に向つて活動し始めたと言ふ事を少しも御存知なくして、やがて坊やを抱き上げられた。先生は温かくこもつた笑ひ聲を、軽く連續的に發せられて、子供の感覺的興味を引くに足るやうな、いろ／＼の掛け聲や呼び聲を工夫されながら、尙抱いた坊やを差し上げたり抱き降したりして、坊やの身體に遲緩なる上下の運動を與へた。此の半年前に九州で御生れに成つた初孫に當られるお嬢さんを、先生は未だ御覽に成らない時であつた、自分は室の一隅に立つて、慈愛に充ちた祖父としての先生の面影を象徴しながら、交々湧出して來る感謝と羞恥と喜悅と心配と

を以て、此の興味ある對照が如何に發展して行くかを、あやぶみ乍ら窺かに觀察し始めた。

衝動行爲を妨げられた爲めに、坊やは「オプー」〜「イヤイ」〜「オプー」と呼びながら、差上げられたなりで無規律に且つ力任せに其の手足を彈力的に動かして始めた。そして此の感謝すべき光榮ある妨害から免れる爲めに、多くの運動の中から彼の選んだ最も有効のものは、兩手を間断なく働かせて先生を押し除ける事であつた。坊やの身體が上と下に動くにつれて、先生の身體もそれ〜異つた部分に於て、坊やの小さい手の突撃を受けなければならぬ苦である。最初の突撃は先生の眼鏡をかすめて左の顛頭へそれた。第二のお突きは先生の鼻を擱んで右の頬を、第三は先生の咽喉を攻撃して、何れも確かに手筈が有つたらしい。足は足で更らに獨立の運動を起して、先生の胸のあたりを蹴やうともかく、——驚き周章して六つの手は、飛行機隊のやうに閃めきながら一齊に此の小さい魔物に飛び付いて、危難に陥つて居られる先生を救ひ參らせて、扱て互々に相顧みて、少し経つてから、倒れるばかりにとつと笑ひ崩れたのであつた。

悠々として暮れて行く晩春の薄光は、鎖した窓の摩り硝子の爲めに更らに強く朧ろにされた。暗い室内に小さい〜微粒のやうな光が縦横に飛散してそれが次第に濃く明るく成つて、先生と坊やの圍りを包んで居るかのやう、——聖者のやうに瘦せた頬に大きい深い皺を寄せて微笑しながら、所在を失つた兩手を軽く外套の隠しに入れて、少し俯き氣味に立たれた先生の姿は、横顔だけほの白く夕闇に浮き出して見えた。

純にして聖なる先生の面影は、此の時以來大理石像のやうに、

強く鮮かに自分の記憶に彫り付けられて、先生の代表的の姿と成つた。

この不可思議な對面を御縁にして、家族打揃つて是非御伺ひしやうと話し合つて居るうちに、坊やは慢性の腸の病氣にかいつて、日に〜機嫌が悪くなつた。八月の末に代々木へ越してから、つい御伺ひする折も遠ざかつて、其の翌年春頃から先生の御病氣がきざしたのであつた。先生と坊はかゝる場面を以つて、唯一度連絡されたのみであつた。

求めても獲る事出来ない此の珍しい又貴い五月六日の夕べの光榮の全體の經過を、最も鮮かに展開させながら、殊に取り分けて興味なる場面に最も長く自分の注意を低徊させながら、かくして徳望一世の學界に高かつた先生と坊やとの間に結ばれた不思議な因縁の繪巻物は、自分がアスファルトに眼を注いだ時は全體の形は大きく表はれ、遠くを見渡した時には小さく縮少され、冥目した時には全體の光景が暗くなり、空を見上げた時には明るく變つて来る。そして暖かい血液と逼るやうな呼吸とが結晶して出來た知遇、光榮、面目、感謝、感恩……と言ふやうな考へがひとり〜で先生の葬儀の日の一々の光景と眼まぐるしい程に急速に對照されて、この光景は考への走り方に支配され引づられて、それからそれへと發展してつながつて行く。

文房具店の前まで來ると、例によつて自分の眼は、たつた一人店番をして座つて居る此屋の老主人の、氣むづかしげな神經衰弱的な顔を視なければならぬやうに、其の方に引き付けられた。

本郷を歩く時にいつも氣に成つて仕方が無いのは、此の老主人の顔、殊に其の怒つたやうな眼付きと顔色とである。此眼が何故に氣になるか、どうして自分に一種の不安な感じを起させるか、久しい間自分には分らなかつた。もう一步立ち入つて言へば、事が自分の小さい時の思ふやうにならない不快な經驗に關して居るらしい氣がする爲めに、寧ろ強いて分からせやうとしたくなかつたのであらう。此の眼は自分の最も敬慕した人の最も缺點とする所、即ち氣短かな、あの人に特有な怒つた時の（怒る時は相手が子供でも眞顔に怒つた）眼の表情を、そつくり寸分違はずに表はして居るからであらう。自分をこんな可愛がつて下さる人から、怒る時のこの眼付丈けを取り去つたらと小さい乍らもいつもさう思つて、しみんとひとり悲しかつた。自分は今でも此の眼を見れば、やはり子供の時の悲しい不快な感じがまざると浮いて強く追つて来る、何とも言へない一種の壓迫と抑制とを感ずる。

此の老人の眼の印象によつて、今迄の元良先生に關する綺麗な繪姿が悉く掻き消されて、全體の調子が何となく曇つて陰鬱に成つて來た。若し此の状態を持続すれば、眼の印象を基調として、抑壓された不快な音階を作り上げて、意識の旋律を發展させて行く事になるから、此の後引き續いて織りなされて經過して行く心像にしても聯想にしても、決して快いものである事は出來ぬ。此の場合に於て自分は、新しい刺戟によつて新しい場面を開拓し、全く別様な意識の世界を導いて來なければならなかつた。扱て取り敢へず此の道路を横切り、掘りならした處へ敷いた藁を踏んで、やがて木片をつめ込んだ車道に登つた。

赤門の前を歩いて居るうちに、體中かたらく成つて著しく疲勞を感じて來ると共に、例によつて淡い假睡の状態がそろ／＼始まつて來た。睡眠のすぐ前とか、椅子や壁にもなれた時、机に倚りかゝつた場合は勿論として、或は車の上、電車の中、劇場の席、講演の會場、對談の時、甚たしい時は歩行の途上に於ても、――働き過ぎた時、勞れた時、睡眠不足の時、知力を使ひ過ぎた時などに、いつも此の假睡が起る。

假睡の帝國は、覺醒の意識と睡眠の世界の間に位して、點線を以てゆる／＼圍まれた廣茫たる砂漠である。假睡は混沌界の如くに現はれて、それから夢の世界が發展して行く事もある、現實の醒めたる世界に立ち得る事もある。假醒に於ては覺醒と夢幻とが重なり、現在と過去とが融合し、聯想の法則の鎖を切斷されて遊離した心像は、電光の如く速かに來往し、覺醒の時よりも鮮かにさながら幻覺の如くに活躍する。そして視覺型の自分ですらも、此の世界に入れば音の心像も極めて明確に聞えるのみならず、運動の心像も非常に鮮かに感ぜられる。軽い廣い延び／＼した、自由自在に飛び廻る事の出来る天地である。

しかし自分を引付ける假睡の魔力と權威とは、決して單に是のみではない。自然に開展するに任せて、いつも現はれて來る自分に親しい假睡の世界は、子供のやうな心になつて子供の時代をあり／＼と見る事である。美しい豊富な視覺の心像を以て、古いなつかしい昔の夢が、再び繪のやうに浮び出して來る事である。

子供の遊戯を観察すれば、誰も居ない所にたゞ一人でしきりに應對をして御話をして居る事が珍らしくない。所謂「想像上の御友達」が明瞭なる視覺の心像と成つて、活人畫のやうに現はれて

來たのを自分の向側に投出して、それとまじごとをしたり會話をしたりするのである。然るに齡と共に此の暇のかゝる視覚の心像は追々消滅し、之に代つて働らきの早い聽覺や言語や運動の心像が發達して來て、主として思想を運用する役目を、急速に手取り早く果たす爲めに用ゐられ、かくして寂しい抽象的な意識の世界が出来上がつて來る。此の時に當つて、希臘の哲人の説いたやうな高遠なる愛を以つて、遠いあこがれの國を現世に呼び返へすものは、わが假睡の世界である。

假睡の過程は、發展すれば夢とも成り得るもので、要するに睡眠前の現象である。それ故自分一人の場合はいよとして、公けの場處に於ては、この假睡の美に感溺して居るうちに、何時の間にか眞物の睡眠又は座睡に陥る危険を免かれ難い。若し假睡を假睡の儘として、遊離し浮動し去就し來住する心像の自然的開發に任せるならば、決して自分は其の睡眠の推移を防ぐ事は出来ぬ。若し又睡眠から防がうとする意志の努力が明瞭に發現すれば、其時すぐに美しい自由な聯想のベールが除かれて、むくつき覺醒の意識が現はれて來る。自分は大低の場合に於ても自然に等一の方法を採りて、假睡の心像を極度まで發展せしめる。

ある夏大學の青山内科の醫局に居る友人が訪れて來て、友人は醫學上の話を始めた。二人で丸机に向つて腰をかけた。自分はガラ／＼椅子により掛かつて其話を聽いて居た。此の青年醫學士の話はいつもの通りの調子の低い、だるい、少しも感興の乘らない話振りなので、自分はウン、ウン、ウン、と返事をしながら

ら聞いて居るうちに、間もなく假睡の状態に陥つた。そして何時となしに友人の物語る聲が假睡の中に表はれて來る人物の話し聲と置き換へられて、やがて自分は其假睡心像中の人物と會話を始めた。つまり感覺的刺戟の強さは心像の強さに壓倒されてしまひ、友の話し聲は全く自分の意識から脱落して、心像としての會話は明瞭に且強烈になつて來た。そして友人の話が一向振はないと反對に、心像中の話がだんだんはずんで來て、これと應答して居る自分は、つい實際に「さうださうださうしやう」と現實の大きな聲で返事をしてしまつた。勿論其返事は、友人の話には全く通用の出來ない、極言すれば胡化化しの利かないものであつた。

自分の假睡に就いては猶記すべき事が非常に澤山ある。しかし最も貴き紀念として、今でも鮮かに記憶に残つて居るのは、元良先生に親しく呼び醒まされた時の光景である。それは、前に述べたやうに、自分が助手をして、市會議事堂で先生が練心器の御話をされた時の事である。御話がすんでから、自分は講事堂の後の横の方の席に腰を掛けて、伊澤先生の演説を聽いて居た。暑さと疲勞とで失神したやうに成つて、椅子にもたれて居るうちにいつの間にか假睡の状態に陥つた。フロツクコートを着て壇上に立つた肥大な老紳士の音吐がガンガン耳に残りながら、薄風色の新しい細長いすらりとした革手袋を中心とした場面が忽ち展開して、輕快な假睡の心像が活き／＼として現はれて來た。白い樺の木の間隙に林を越えた向ふの明るい野原で、其手袋が落ちて居る。それを捜す爲めに自分は、繪にある小川の流れるやうにうね／＼と遠くの方から續いて居る小徑を辿つて、軽くする／＼と歩いて

居た。——あとの細部の光景は、今は殆んど記憶に残つて居ない、

——やがて何か大きい黒い重いものが右の肩に觸つて、ドーンといふ大きい音がして、自分の身體が重心を失つて横へ倒れかけた。假睡の心像が忽然と消えて、はつと我に歸つたら、呼吸も脈搏も止まるやうな意外な現實の場面が出現して、自分の眼——と言ふより寧ろ全身を、直角にぐいぐいと壓迫して居る。此の壓力をかなぐり捨てて、やうに振り拂つて、よくよく見定めたら、元真先生は瘦せて見える御腰を殆んど直角に屈め、自分の肩に手をかけて、真面目な御顔に微笑を含んで低い聲で言つて居られるのであつた。先生が何度仰しやつて始めて其意味が自分に通じたかは、勿論今になるまで知る事が出来ない。兎にも角にも自分で始めて明瞭に意識した言語は次のやうな意味であつた。「なんなら貴方は先きへ御歸りに成つてはどうです、御疲れてせうから、え、御歸りなさい」。自分は慚愧と當惑と辯解と謝罪との前馳とでも言ふやうな、一種の混沌とした胸騒ぎがするのみで、固よりまたまとまつた考へも何も浮んで来る餘裕がない。併し妙に手や指を擦れるやうに振はせたり、急しませたり、頭をオロ／＼動かしたり、口を無節度に開閉させたりするのは、要するにこの統一的中心の未だ出來上らない個々の考を一々型にして叮嚀に先生に御目にかけて居る譯であるから、この劇的な場面の一員である先生の既ば、どうしても次のやうに働いて來なければならなかつた。先生は懷中時計を出して一寸見られて、かぶせるやうに、「いろ／＼有り難う御座いました。夕方の會には貴方も御出にならでせう、私ももう少したつたら行きますから、其時にまた」と、低い声でも優しい情けの籠つた聲で仰しやつた。

## 雜 錄

### ○フレーベル會總會

フレーベル會第十八回總會は四月二十日東京女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開かれました。午前九時半開會、會員一同君々代合唱の後中川會長の挨拶があり、會務報告を終り、吉田熊次氏の「兒童に關する觀念の變遷」と題する講話あり、そりより議事に移り、會則の（改正別項會告の通り）と保姆養成につき當局へ建議の件（追て御報告致します）とに就て協議し、一同別席に於て食事の後、午後一時より再び開會、横山榮次氏の「教育系統上幼稚園の占むべき地位」と題する講話あり、又會員中よりは野口學習院女學部幼稚園主事、後藤双葉幼稚園主任、及び矢太郎三島幼稚園長の談話あり、席を更めて茶菓の間に懇談し、或は陳列品を參觀し、夕刻に近く散會いたしました。尙ほ當日の講演及談話は次號の誌上に其の筆記を御紹介する筈であります。當日の陳列品中主なるものには神戸幼稚園の「色丸排へ具」、色札排へ具、「敷へ方遊び」「糸巻遊び」等の新案保育具大阪江戸堀幼稚園の「自然物利用の雛人形」「糸綾取り遊び」「小砂箱」模形及寫眞、「自然物利用手技」いろ／＼。同汎愛幼稚園の「秤遊び具」（以上は關西みやげとして倉橋幹事の乞ひ受け歸りしもの）、青森幼稚園の雪中保育の寫眞。學習院幼稚園の幼兒製作品「型にて描きし圖畫」。東京手技研究會の手技新案數種。池田とよ子氏新案「型紙」。東京女子高等師範學校附屬幼稚園幼兒製作品數種。東京フレーベル會出品「モンテッソリ式教育具」。及び新玩具等がありました。

た。

### ○群馬縣保育會總會

群馬縣保育會第五回總會は四月二十七日同縣伊勢崎町伊勢崎女子尋常高等小學校附屬幼稚園に於て開かれました。同會々長高崎幼稚園長深井景員氏始め縣内の幼稚園長、保姆諸君、其他幼兒教育に熱心なる諸氏の出席あり。有益なる會合でありました。

### ○幼稚園醫會

下關市にては先般市立第一幼稚園に於て幼稚園醫會を開き左の諸項を決議せられた由であります。斯くの如く幼稚園醫諸君の協議會が各地方に開かれて、益々此の方面の改良發達を謀り度いものであります。

一、毎年五回(身體検査施行後)集會シ幼兒衛生上ノ協議ヲナスコト

二、幼兒ノ身體検査ハ各園トモ毎年五回(四月、七月、九月、十二月、三月)施行スルコト

三、來四月ヨリノ入園希望者ニ對シテハ三月下旬身體検査ヲ執行シ傳染性疾患ヲ有スル兒童ハ治療スルマデ入園ヲ拒絕スルコト

四、現在園兒ニ對シテハ下脚ノ長サヲ測定シ之ニ適當ナル腰掛ヲ供給スルコト

五、體重ノ測定ハ裸體計量ニヨルベキヲ以テ検査室ハ燬爐ヲ設ケテ保温上遺漏ナカラシムルコト

## 會 告

本會々則左の通り第十八回總會に於て決議改正いたし候

### フレーベル會規則

第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノトス

第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ醸出スベシ

第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益

アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行

フ 一 總會 毎年十月之ヲ開キ保育ニ關スル演說

談話、保育參考品、幼兒成績物展覽、會務ノ報告等ヲナス

一 常會 毎年二月、六月ノ第二土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス。尙ホ毎年四月廿一日特ニフレールベル紀念ノ爲會ヲ開ク。

一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスルモノヲ以テ組織ス

但シ別ニ組合規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス

一 雜誌發行 毎月一回雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス

一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

### 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長 一人 會務ヲ總理ス

主幹 一人 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス

幹事 若干人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

評議員 若干人 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス

第八條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス

第九條 主幹、幹事、評議員ハ二ケ年ヲ期シテ會長ヨリ推舉スルモノトス

第十條 本會ハ必要ニ應シテ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルルコトアルベシ

第十一條 此規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス



ゴルドン女史著  
菅原教造譯述

美 學 講 話

全十八講

『婦人と子ども』附録

第一講 入門

第二講 心像の話

第三講 感情の話

第四講 藝術の起原と職分

第五講 リズムの話

第六講 舞踊の話

第七講 音楽の話

第八講 色彩の話

第九講 線と形の話

第十講 圖案の話

第十一講 建築の話

第十二講 彫刻の話

第十三講 繪畫の話

第十四講 言語の話

第十五講 詩の話

第十六講 戯曲の話

第十七講 散文の話

第十八講 美と藝術

## 第五講

## リズムの話

### — 目 次 —

リズムとは何ぞや——生理的リズム——注意の動搖——主觀的リズム——客觀的に定めたるリズム——リズムの複雑なる形——リズムと仕事——リズムは運動現象なり——リズムと情緒——種々なる速度テレポの美的價值——二部音格の美的特性——三部音格——藝術的形式としてのリズム

### リズムとは何ぞや

リズムとは云ふ言葉を廣義にとれば、規則的に繰り返される活動又は事件は、凡て皆是に入ります。此の意味に於ては、自然界の、リズムと稱へて居る事も、又多くの自然現象、例へば、四季日夜の變化・水の流れ・植物の生育等を、週期的であると云つて居るのも、此の廣義に取つた呼び方に従つて居るのであります。併し、我々が意識してリズム的として經驗して居る現象は、是よりもずつと範圍が狭くなつて居ります。例へば、晝夜冬夏等の週期性は、餘り緩慢である爲に感

せられませんし、又エーテルの震動の如きは、餘り早過ぎるので感せられません。何故にそう云ふもの迄をリズム的と呼ぶかと云ふ理由は、つまりさういふ現象がリズム的に感せられるからではなくして、時間の評價が違つて居るとしたら、（即ちもつと速に繰返へされたら）さう云ふ變化も振動も感じ得らるゝ筈である、と云ふ推論から來て居るのであります。併し茲ではさう云ふ間接的問題は措いて、我々が現在の直接經驗として感ずる、又は少くとも感じ得るリズムに就て述べる事に致しま

せう。扱て其の經驗の性質を説く前に、豫備知識として或生理的事實を知つて置く必要があります。

### 生理的リズム

身體の週期的の作用の中に

は、人にさう感ぜられないものもいくらもありま  
す。例へば睡眠と醒覺の様に、餘り巡り方が緩い  
場合であるとか、又消化作用中の内臓のリズム的  
な運動であるとか、かう云ふものは、全く感ぜら  
れないのであります。併し之に反して、脈搏の連  
打、呼吸作用の運動、歩行・遊泳・舞踊等の如きは  
明白にリズム的であると感じ得らるゝ週期的作用  
であります。其他談話、唱歌の如き有意行爲すら、  
リズム的形式を備へて居ります。

實際如何なる活動でも、繰り返されるへすれば、  
自動的且規則的となるもので、生物學上から見れ  
ば、これが取りも直さず最も効果のある經濟的の  
工夫であります。併し凡ての行爲は、規則的にな  
りはするものゝ、一分間に幾回と云ふ風に、絶對  
的に固定した形になるものではありません。要す

るに生理的リズムは、其度合を色々に變へる事が  
出来るので、或は速める事も遅くする事も出來、  
又其の自動的性質を破らずに時々不規則にする事  
も出来るのであります。

### 注意の動搖

生理的作用には、著しい週期

性があるのみならず、注意の如き心的作用にも、  
この週期性が現はれて居ります。注意は斷えず變  
移動搖して居るもので、或單一な感覺印象に注意  
をして居る間にも、其の對象に或る新しい状態が  
現はれて來る事が分ることもあり、又心が外れて  
居れば、對象に注がれて居つたのは、單に感官の  
みに過ぎず、隨て變化に氣の付かぬこともありま  
す。もし或る極限的な刺戟、たとへば見えるか見  
えぬか位の灰色の一點とか、又は聞えるか聞えぬ  
か位の音を注意の對象とすれば、其の刺戟は客觀  
的には同一であり乍ら、其れが見えたり、見えな  
かつたり、聞えたり聞えなくなつたり、色々變  
化すると云ふ事が分ります。



に十より早く来るか、一秒に一ツより遅く来るか（グントは遅い方を四秒に一ツとして居りますが）の時には、すぐに群別を意識する事が出来なくなります。

數人の觀察者が云つて居ります通り、群別の型は全く速度に依るものでありまして、速度の緩い時には普通二ツづつ（二音一組）と、三ツづつ（三音一組）とに聞きますし、速力が増すにつれて、四ツづつ（四音一組）、六ツづつ（六音一組）、八ツづつ（八音一組）聞く様になります。概して二・四・八等の群別は、三・六等のよりもたやすく聞き附ける事が出来、五・七の群別は不自然でありまして、もし出来るとしても、殊更に努力しなければなりません。主観的リズムは普通無意識に起つて、人によれば其れを感せぬ譯に行かないものでありますが、併しリズムの形式は、意識的に又は暗示を以て變へる事が出来ます。

米國の心理學者マイナー及スクロイヤーの如き

人々は、アクセント即ち強勢の無い群別は、リズムの古い（希臘羅馬時代の）形式であつて、通常（英吉利や獨逸で）は強勢が附いて居ると云つて居ります。此の強勢の自然の位置は、音格の最初の音の處でありまして、其處で揚抑格（ $\uparrow$ ）や揚抑抑格（ $\uparrow\downarrow$ ）が出来ます。三及四部音格の場合によくある様に、強勢に二ツの段がある時の自然の形は、マクヅーゴールに従へば、揚抑抑格には（ $\uparrow\downarrow$ ）、抑抑揚格には（ $\downarrow\uparrow$ ）、抑揚抑格には（ $\uparrow\downarrow\uparrow$ ）であります。四部音格の場合ならば強勢は、（ $\uparrow\downarrow$ ）でも（ $\downarrow\uparrow$ ）でも何方にもなります。

主観的リズム化は、單に音の系列を聞く時のみならず、閃光の系列を見る時にも起ります。是に關するマイナーの實驗は、今まで餘り人に知られなかつたこの事實に、人の注意を促して居ります。客観的には同一である光の閃めきを見て居ますと、觀察者は或は毎秒、或は二秒毎、又は四秒毎に、強勢を附けて見ます。光線の強勢と云ふのは、



は、希臘及羅典の韻文の特徴でありまして、英吉利獨逸などの韻文と相對して居るものであります。

第三に高低(及び音色)に就て申します。音の高低の變化は、強度の變化として扱はれる事がよくあります。そして是は佛蘭西語に現れる強勢であります。又振動數の多い即ち高い音色と、パツとしたはでな性質の音色とは、共に比較的強く聞こえ易いものであります。

斯様な純然たる形式的な強勢のつけ方以外、論理的又は表出的に強勢を付ける事も出来ないではありません。リズムは詩及音樂で平生我々が知つて居るとほり、表出せられて居る思想に依て、非常な影響を受けます。言葉は電話機の打音の様なものではなく、論理上の重さが色々異つて居ります。言葉に依ては、其の意味に至當して居る強勢が、形式的構成の命ずる強勢と全然違つて居る位、意味の重いのもあります。音樂及舞踊のリズムにも、斯様云ふ事はあります。

### リズムの複雑なる形

リズムの單位は、僅

に二つしかありません。其一は二つの音節から成る脚、今二つは三つの音節から成る脚であります。他の種類は、皆此二つの中に入つて了ひます。たとへば四つの群別(即四音節一組)は、第二の強勢で、其れを二つづつ(即音節二組)に分ける事が出来ますし、六つの群別は第二強勢で、これを三づつ二つ(即音節二組)、又は二つづつ三つ(即二音節三組)に分ける事が出来ます。英國の心理學者のマクツォールの説では、二、二、二の如きは四つの音が三つづつに群別(即二音節二組)して居ない故に、例外の様に思はれるかも知れないけれども、實は三つづつのを、二つ集めた(即ち三音節二組の)群別と同じである。要するに好い感じを與へんがためには、第四の音符の後には休止が入り、従つてこの音格は六拍子となるのであると云つて居ります。

### リズムと仕事

身體的の仕事を、リズム的



な方法でやりますと、その効果<sup>イ</sup>が著るしく増して來ます。これに對する歴史上の證據は、仕事中に調子<sup>イ</sup>を取る人即ち音頭取りを置くと云ふ一般原始人民間に廣く行はれた習慣によつて、明かであります。此の習慣は、仕事に規則と順序が必要であると云ふ事を、自然に感じた結果であります。實驗

に依ても、やはり仕事にリズムの形式を用ゐるの利がわかります。オーラモツンは、リズム的な仕事と、リズムでない仕事とを、比較しやうとしましたが、被験者達が、皆すぐにリズム的な習慣に陥つて了ふので、遂に果しませんでした。併し彼はリズムの遲速は、仕事の量に相異を來すのを發見致しました。一般にリズムが速ければ速いだけ、定まつた時間中に仕上げられる仕事の分量が多いのであります。して見ると、リズムが遅ければ、時間が長いだけ仕事の質が良いかと思はれますが、さうではありません。却て其の反對に、執務者が自分自分に合ふ速度を許される時に、仕事の質

が優つて來ます。客觀的に附けられたリズムは、現存の傾向を自動的に早くする様にしますから、筋肉の運動が容易になります。

肉體的の仕事と同じく、精神的の仕事も亦、リズムが伴ふと容易になります。注意の範圍即ち一緒に意識し得る印象の數は、其の印象がリズム的に集つて居れば、増大致します。現今世界第一流の心理學者たる獨逸のヴント、及他の學者の説に依れば、斯様にしてメトロノームの音を四十までは（八・五、又は五・八にあつまつて感せられれば）、同時に心に把持する事が出来る、即ち統一ある全體として考へる事が出来ると云つて居ります。故にリズムが伴へば、記憶も評價し得る位たやすくなる譯であります。獨逸の心理學者のミュラーやシューマン、及び米國の心理學者のエム・ケー・スミス其他の學者は、覺える材料は、リズムの爲めに一纏めになつた様な感じがするので、覺え方が非常に速くなるのであると云つて居ります。故に

現に行はれて居る運動に、リズムを添へますと、其の活動の効果を増大いたします。

外的現象に於けるリズム、即ち（作出されたリズムではなく）知覺せられたリズムは、觀照者の身體器官にリズム的な運動的反應を起す傾向があります。例へばメトロノームの音に耳を傾けて居る人は、知らず識らず、頭・手足・舌等を動かして拍子をとります。此の拍子をとる事は、必ずしも各音毎に別々の運動をすると云ふ譯ではなく、一つの運動で、五六の音を包括することもあませう。果していくつの音が、一つの筋肉運動に含有されるかと云ふ事は、主として音の速度に依ります。

### リズムは運動現象なり

近頃の研究では、

リズムの意識的評價は、前述の如き筋肉活動の結果であると云ふ事が分かりました。米國の心理學者ステットソンの説に、「リズムは凡て動的である。これは實際の運動から成つて居るものである。關節をまはす事は必ずしも必要ではないが、運動と

して意識せらるゝ、筋肉状態の變化は、知覺せらるゝリズムにも作出せらるゝリズムにも、共に必ず伴ふものである」と云つて居ります。此の考へは、眞の群別感情は畢竟我々自身の運動器官に依るものであると云ふ意味であります。

茲に至つて、第三講の感情の處で述べたジェームスの情緒説の基礎をなして居る考と、頗る相似た考に戻つて來たと云ふ事が御分りになりましたやう。始めに、感覺的刺戟即ち一系の音があり、それがリズム的な筋肉反應の系列を起します。即ち外的な音の系列に對して、實際に群別の「感じ」を起させるものは、さう云ふ自分の筋肉的反應の感じなのであります。猶此の事實は、此の實驗で明かであります。

マイナーの行つた實驗によれば、筋肉活動が我々の外的事物の知覺の仕方に及ぼす効果が分かります。マイナーは被験者に、一系の光の閃めきを見せて、其の系列に合はせて拍子を打つ様に命

じました。所が強く打ちますと、丁度出合つた光の閃めきが、客觀的に明るく見える事が分かりました。マイナーの意見によれば、主觀的リズム化とは、強度に對する錯覺であつて、要するに吾々は自分自身の筋肉の緊張をば、リズム化されつゝある一聯の印象の客觀的強勢であると思つて了るのであります。

## リズムと情緒

劇烈に引き切りなしに興へられるリズム的な刺戟は、よく人を非常に興奮させるものであります。此の興奮を放散する形式と、其の情緒的意味とは、幾分かは刺戟の内容に關係があります。例を舉げて申しますならば、音の刺戟が、陣太鼓であるとか、又は戰を挑ませるやうな刺戟であれば、其の結果として起るものは、戰はんとする情緒であります。もし又刺戟が宗教的讚願、又はリズム的の敎詞であれば、情緒は自ら宗教的になつて參ります。併しかう云ふ刺戟の内容と云ふ事を別として、純粹なるリズムはそれ

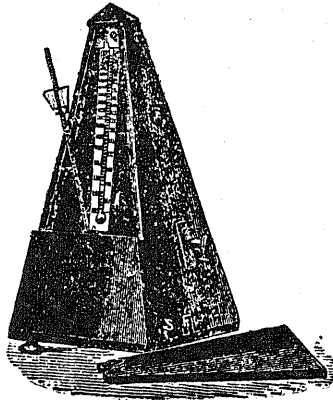
自身に或る情緒的狀態を表出する事も確かであります。ヴァントは『リズムは其れ自身情緒ではあるが、併し「リズムは強い興奮を伴ひ、且一般的情緒狀態を表出し得るものである」と云つた方が、更に眞であらう』と云つて居ります。細かい所は措くとして、例へばリズムの不規則は、活動の中断を意味して居るのを見ましても、リズムが自然にいろ／＼な情緒的意味をよく表はして居ると云ふ事が分りましたやう。

## 種々なる速度の美的價値

美的効果を興へ

る速度の範圍は此處に示した通り、普通のメトロノームの目盛りになつと出て居ります。其れは一分間に、四十回から二百八回迄であります。さういふ速度を示して居る音楽上の言葉も、亦其の美的効果を暗示して居ります。さういふ言葉とは、一分間四十から六十八位までの速度を示すラルゴ（最も緩徐に）は、廣く又は大きい意、六十八から九十七位までの速度のラルゲットー（緩徐

に)は、稱や廣くの意味、九十七から百二十八位までの速度のアダジオー(稍緩徐に)は、ゆるくそつとの義、百二十八から百五十五位までの速度のアンダンテ(歩行の速度にて)は、動く又は行くの意、百五十五から百八十二位までの速度のアレ



グロ

(急速に)

は、快活

に陽氣に

はでにの

味意、百

八十二か

ら二百八

までの速度のプレスト(最も急速に)は、さつさ

と、又は極めて速くの意味があります。

緩慢な調子は重大、莊嚴、威嚴等の感じを與へ、又中ぐらゐの調子は優雅、典禮であると云はれて居ります。此の中位のは、緩い調子の重々し

さも、又速い時の忙しさも共に無いので、安靜平衡及調整等の感じを起させます。之に反して急速な調子は、活潑で興奮的であつて、之れが強い音運動又は言葉と結合する時は、非常に振起的となり、緩いのと伴ふ時は、陽氣で綺麗で、稍や浮かれ氣味となります。

斯様云ふ速度の表現は、注意及豫期の現象として説明が出来ませう。速度の緩い時には、一定の時間内に得る刺戟が、比較的少ないのでありますから、或る強勢から他の強勢迄には、意識的に注意を持ち越す時があり、又適當な支持物なしに宙ぶらりに成つて居る感情があります、此の人の努力に對する要求が、即ち緩い速度に沈重と莊大の効果を與へるのであります。葬禮の曲は、藝術的的に用ゐられるリズムの中、最も遅いものであります。佛蘭西の大音楽家ショパンのマーチの始めの方は、集合感情を與へる事の出来る位の早さではありますが、猶記號と記號との間には、

悲壯な不定の感情と沈黙とを與へて居ります。

七十乃至百五十拍子位の、中庸の速度、又はラルゲットー、アダジオー及びアンダンテ以上のは、上に安靜な優雅な統制せられたる速度であるとして申しましたが、かう云ふ都合は、或重要な生理的リズムの速度であるので、快い安靜の感じが伴ふのでありませう。心臟の鼓動はラルゲットー位の度で、歩行・行進及舞踊に好い度合は、九十乃至百であります。馳走や或種の舞踊及談話に快適な度合は、もつと速いのであります。オーラモッフは軽い物を指で擧げさせる試験をして見ました所が、被験者等が最も快適として選んだのは、一分間に七十乃至百拍子でありました。

急速な調子は、急速な運動を促し、又其れに伴ふ切迫と興奮とを暗示する傾向があります。急速な調子に對しては自然注意が惹きつけられます。

迅速な音列は同じ一分間にも遅いものよりは強い感動を起させ、豫知せぬうちに符がどん／＼此に流

れ込んで來ます。アレグロ及プレストに潑刺たる活氣を添へるものは、此の刺戟の多量と其の與ふる驚きとであります。これよりずつと速い調子になりますと、それにおくれまいとする苦しい努力が要ります。

## 二部音格の美的特性

一拍子づつの群別は

リズムの中、最も簡單な形式で、少くとも韻文では今日迄一等廣く用ゐられて居るのであります。

二部群別は單に簡單なるのみならず、力と重味とが添はつて居ります。此のリズムが簡單で自然に思はれて一つの理由は、我々の通常の運動が、多く此のリズムにあてはまつて居るからであります。馳ける時又は歩く時は、足の運動につれて、手を交る／＼振ります。擧げると緩めると、押すと引くと、延ばすと縮めると斯様に二つの状態を含有する運動もあります。是等二種の状態は、詩の脚の強變(アルシス)と弱變(テシス)とに通じて居るとビュッヘルは云つて居ります。又二部音格は

自然遲い速度と伴ふ事實に見ても、「重々しい」と云へます。

主觀的リズム化は、客觀的リズムが遅い時には二つつつになる、と云ふ事も覺えておかなければなりません。ポルトンの被験者達には、〇、七五九のリズム、即ち一分間に七十五回、即ちララゲットの拍子で音が相續いた時にさうなりました。

二部音格は次のものだけに變化する事が出来ます。之を詩の言葉で云へば、揚抑格(—)、抑揚格(—)、揚揚格(—)、抑抑格(—)の四つであります。併し最後の二つの脚は、其れを讀む人も聞く人も、二つの音節の中、何れかに強勢をつけ度がるので、随つて其れは前二者の何れかになつて了ひますから、長短によらず音列を支持する事が出来ません。一個の脚としては、揚揚格は堅實強固、抑抑格は輕快優雅の感じを起させます。

揚抑格は古代英詩の特徴でありました。故に英詩に在ては、揚抑格の方が抑揚格よりも古いので

あります。揚抑格は抑揚格よりも獨立的であると云はれ、又事實抑揚格より直截な素朴な効果を與へる様であります。重要な音節を先にして、輕い方のをあとにするのが簡單素朴であり、輕いのを先にし重いのを後にする方が技巧的であります。抑揚格はこの後者に依て高潮に達し、戲曲的效果を奏します。

或人は「揚抑格は衝動より發して進み、抑揚格は回想せんとしてとゞまる」と申しましたやうに抑揚格は多少揚抑格より急速な感じを與へます。強勢のついた音の後に來る休止が、實際より短く思はれるのは、強勢のある音が長く續く様に思はれる爲めで、此の理に依て抑揚格の行は密接して居る様な氣持がし、其行は速い様な感じがするのであります。

今一つの錯覺は、抑揚格と揚抑格との相異を明白に示して居りますから、それもお話しなければなりません。震動數は同じでも、強い調子の方が

柔かいのよりも、音が高いと思はせるものであります。口語のリズムに於ても、音の力が増すと、音の高さも高まる傾向があります。此の二つの事實に依て、揚抑格は各脚が高く始まつて低く終りますから、下降的變化と云ふ事が出来、又抑揚格は、各脚が低く始まつて高く終りますから、上昇的變化とも云ふ事が出来ませう。

無論リズムが詩及音樂に應用される時には、他の多くの要素が斯様云ふ傾向を制限は致しますが二者の抽象的區別としては、此の傾向が役に立ちます。

### 三部音格

一部音格は二部音格から出たものだと説もあつて、其進化は多分(一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十) (十一) (十二) (十三) (十四) (十五) (十六) (十七) (十八) (十九) (二十) (二十一) (二十二) (二十三) (二十四) (二十五) (二十六) (二十七) (二十八) (二十九) (三十) (三十一) (三十二) (三十三) (三十四) (三十五) (三十六) (三十七) (三十八) (三十九) (四十) (四十一) (四十二) (四十三) (四十四) (四十五) (四十六) (四十七) (四十八) (四十九) (五十) (五十一) (五十二) (五十三) (五十四) (五十五) (五十六) (五十七) (五十八) (五十九) (六十) (六十一) (六十二) (六十三) (六十四) (六十五) (六十六) (六十七) (六十八) (六十九) (七十) (七十一) (七十二) (七十三) (七十四) (七十五) (七十六) (七十七) (七十八) (七十九) (八十) (八十一) (八十二) (八十三) (八十四) (八十五) (八十六) (八十七) (八十八) (八十九) (九十) (九十一) (九十二) (九十三) (九十四) (九十五) (九十六) (九十七) (九十八) (九十九) (百) の様な系列を経て來たものと考へられて居ります。併しデュッヘルデュッヘルの如きは、三部音格は、鍛工が工場で鍛鍊する時の様な勞作運動から來たものだと云つて居ります。其の根源は兎も角、今日では三つづつ一組の群別は、全く自然に思はれて居ります。

三部に於いては、二部音格よりも音や、音節が速く續きます。主觀的リズムが自然三拍子づつになつて行く時のリズムは、〇、四六〇、即ち一分間に百三十回、即ちアンダンテアンダンテの速度であります。

三部音格は、二部音格の様に堅實強固を暗示せぬ代り、輕快、雅美、繊細の感じを與へます。又是れにはもつと等階があり、完美と平衡とが一層よく表はれます。揚抑格トロボウリ(—)及び抑揚格アイトプス(—)の脚では、輕い音節が強いのに全然従服して居り、従つて脚の二部間の平衡が欠けて居ります。其の反對に揚抑抑格ダクティル(—)又は抑抑揚格アンシテラキ(—)又は抑抑抑(—)では、輕い音節が重い音節の均合をとつて居ります。

揚抑格トロボウリを抑揚格アイトプスと區別すると同一の點は、亦揚抑抑格ダクティルと抑抑揚格アンシテラキとの區別にも其儘用ゐられます。揚抑抑格は、始めに強く打つので衝動的であり、抑抑揚格の方は、抑揚格の様に高潮に近づいて來ます。次に抑抑揚格は、抑抑揚格が揚抑抑格に移

り勝ちなので、その形を保ちにくい傾きがありますが、これを救ふには、脚と脚との間の休止を延ばすのです。さうすると、句の續きを破つて各單位と孤立させ、随つて其の行を延ばすのであります。抑揚揚格（——）も、その軽い音節と強いのとが非常に不均合でありますので、抑揚抑格（—（—））と同じく形をくづさぬ爲めには、脚間に一寸の休止が入ります。

此の種の論には、有名なるコレリツヂの「音律の脚」の詩を等閑にする事は出来ません——

トロキイ 揚抑は長きより短きに跳ぶ、

スボンデー 揚々は長きより長きに

嚴かに緩やかに歩みを運ぶ、強き脚ききく！されど三音節の揚抑々に追

ひすがり得えず、

抑揚は短きより長きに進む、

跳び立ちおどりと速き抑々揚ばつどふ、

長音節一ツ短きを左右に控えて

抑揚抑はゆたかにぞ練り行く

始めと末は長く、中は短く揚抑揚は

たかぶれる良き奔馬の如く、蹄こそ轟かせ。

### 藝術的形式としてのリズム

これ迄に申し

ました通り、リズムは或程度迄情緒的經驗の或位相を客觀化し、又は反映し得るものであります。其の運動的基礎に依て情緒經驗と根柢を共にするものが分かります。純粹のリズムは、藝術仲介物と呼ぶには、餘りに簡單なる現象であり、餘りに内容が狭いとも思はれませうが、複合リズム、即ち要素が大きい複雑な全體の中に配置せられて居る形では、觀照者には美的鑑賞の材料を與へ、藝術家には創作的想像の目當てを與へます。其の複雑な形式は、音楽、舞踊、詩の進化の所に出て參ります。リズムは藝術としては刺戟を與へ、且一般には一層十分な、一層有效な活動に對する手段であります。



# クラブ歯磨

太郎たろう 僕は日本一のクラブ歯磨はみがきで  
 歯を磨いて身体を壮健じょうけんにして  
 加藤清正かとうきよまさのやうに強くなるんだ

武雄たけお 僕も毎朝クラブ歯磨はみがき  
 を使つて乃木大将のぎだいしょうの  
 やうに偉くなるんだ

クラブはみがき  
 クラブねく歯磨  
 クラブ水歯磨  
 クラブおしあい  
 クラブ化粧水  
 クラブあろけ粉



○先生随分おもちやが来ましたね○どこ

から○これはね東京のフレール館から

園長さんが買つて下さつたの○フレール

館のおもちやはいいのね○先

生々々僕シーソーにのせて

頂戴○先生私に此のマ

、ゴト貸して頂戴

○先生之は何

です

之はね積木で

もつて電車で

も瀛車でも出

来て車がある

からほらこら

がりませう○面白いな

僕に貸して○あたいにも

ね先生先生くくくく

○僕にシングルベルス○あたいに球投

○先生此の馬は

之は手綱を引くと前に進みますよ\*

\*君二人で競馬やらうおいこりや面白いな

○さあ皆さん少し静になさい今先生が皆に

貸してあげま

すから

○子供は可愛い

ものね

### 幼稚園恩物類

東京 九段 フレール館

製造販賣

振替東京一九六四〇  
電話番町二九〇九

